
マイフレンド

Sebolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイフレンド

【コード】

N3097P

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

上司のセクハラを受けたためぐみ、彼女が心機一転異動した先で待つものは？

人物紹介

簡単な人物の紹介です。

【飯塚めぐみ】

セクハラを受け我慢できず、部長を投げ飛ばし、部署を異動する。
セクハラのことあつて、
会社以外は男っぽい格好をしている。

【山下雄一】

営業8課のリーダー格、ひよんなことから、男っぽいめぐみと知り
合いになる。

【島内光一】

めぐみがジョギングしているとき、犬の散歩をしていて知り合いに
なる。

2

【大橋優香】

島内の元恋人、急に島内の前にあらわれる。

【奥山】

山下にアプローチする同僚。

【野本】

山下の同僚、奥山に好意を持っている。

【お父さん】

めぐみの父親

【飯塚ゆうき】

めぐみの弟

【米山部長】

めぐみにセクハラをしたエロハゲ部長

あの悪夢から3ヶ月・・・

私は変わるんだ・・・

髪を切り、心機一転今日から・・・

そう誓って、めぐみは日課のジョギングに出かけた。

ことの発端は、めぐみの上司、米山部長の言動からだった。

会議室に呼ばれたためぐみ、

「入りたまえ。」

「失礼します。」

「君、今回の件は一体なんだね」

そう言っつて、米山が席を立ち近寄ってきた。

「すみません。記入漏れがあったようで・・・」

「記入漏れだど!!!君はやる気があるのか!!!」

米山はめぐみの後ろに立ち、両肩に手を置いた

「あの〜?」

妙な雰囲気気付いためぐみは、その手を振りほどこうとした。

「飯塚君・・・今、おれるのは、誰のおかげと知っている・・・。」

すかさず米山はめぐみの尻をなでた。

「キヤッ・・・やめてください・・・。」

抵抗するめぐみ。

「キスでもしてくれたら帳消しにしてあげるからさ・・・。」

今度は、キスを迫ってきた。

これが、米山部長がエロハゲ部長と言われる原因か

「やめてください。」

めぐみは、手を振りほどいた。

「いい加減にしたまえ、抵抗するとクビにするぞ・・・。」

脅しをかけてくる米山。

めぐみは、もうどうでもよくなった。

「そんなに偉いのか？ たかが部長ごときが。．．」
と言い捨て、米山をにらみつけた。

「何だ！！その顔は！！」

そう叫ぶ米山に

バチーン！！！！

めぐみは平手を食らわせた。

「何をする！！貴様！！クビだ！！」

「クビ！？上等よ！！」

そう叫んで、めぐみは、腹部にけりを入れた

「ぐっ．．．」

腹を抱える米山．．

「まっ．．待て．．判る．．話せば．．．わかる．．」

近づくとめぐみに泣きを入れる米山．．

それを見てあきれためぐみが後ろを振り向いた瞬間、米山後ろから抱きついてきた。

「あまいな・・・」

「この〜!?!」

めぐみは米山のみぞおちに肘を入れた。

うっと思を詰まらす米山

次の瞬間

ズシーン!!!!

大きな物音が会議室に響いた。

めぐみは、米山を投げ飛ばしたのだった。

さすがにこの音を聞いた数人の部下達が入ってきた・・・

もう、これで、クビね・・・とめぐみは思った。

しかし、数日後、今まで泣き寝入りしていた女子達が立ちあがった。

そして、めぐみは、異動を認められた。

あれから3ヶ月・・・

めぐみにとって、この日が職場復帰の第1日目だった。

ジヨギング中、大きな犬を連れた男性にめぐみがいさつする

「おはようございます。」

「おはよう」

するとその男性から挨拶が帰ってきた。

そして、犬の方に近づき、頭をなでて

犬とじゃれ合うのがめぐみの日課となっていた。

「ジヨン、元気だったか？」

「めぐみちゃん。元気そうだね。」

「あ、島内さん、ありがとうございました。」

そう言って島内の方を見て一礼をした。

めぐみは、島内と話をするようになったのは半年くらい前、

ジヨギング中に、ジヨンがいきなり飛び掛ってきたのがきっかけだ

った。

そして、いつもやさしく接してくれる島内は、めぐみにとって気になる存在だった。

「今日から新しい部署へ変わりましたから、島内さんの助言がよかったですよ。」

「そうか。よかったな、めぐみちゃん」

相槌を打つ島内を見て何かいつもと違うと感じるめぐみ

「どうしたんですか、なにかあったんですか。島内さん……」

この日に限って、いつもにこやかな島内の表情に少し暗さを感じためぐみは思わず聞いてしまった。

「いや、たいしたことないよ……」

「そうですか？そうは見えないですよ。ひょっとして……」

「うーむ」

しばらく黙る島内

「この間、助言もいただいているし……何か……」

めぐみがまじまじと見ていると島内は観念したらしく、重い口を開いた。

「実は、昨日、友人からの相談で、前に別れた彼女から会いたいと連絡があつたらしく」

「どうしたらいいのか、迷っているそうなんだ、俺としても、どう答えたらいいか？」

「それで、その人は別れた人に会つたんですか。」

「まだ、さつきも言った通り、連絡があつただけだから」

めぐみは、少し考え

「ところで、その友人は、まだ、彼女のこと好きなんですか？」

その質問に戸惑う島内、しばらくして、

「別れたときは、好きだったんだよ・・・今は・・・いや、よくわからない。」

「困りましたね・・・解らないんだつたら・・・」

再び悩み始めるめぐみ

「だつたら？」

「一度、会つたほうがいいんじゃないですか？それで好きかどうか解ると思いますよ、」

あ、時間だ・・・すみません島内さん、もういかないと ジョンमतな」

そういい残し、めぐみは走り去って行った。

家に戻ったためぐみは、今日から変わるんだと気合を入れなおした。

この間まで着ていた女性用のスーツをやめ、思い切って下はスラックス

上はジャケットにワイシャツと、男っぽい服装をして会社に向かった。

今度の部署は、営業8課、社内の女の子みんなが希望する美男・美女が集まる部署だった。

同僚達には、逆にうらやましがられた。

しかし、のぞみは、受け入れてもらえるだろうかという不安で一杯だった。

そんなことを考えながら、めぐみは電車に揺られていた。

電車に揺られていためぐみは、ぞくつとした。

誰かの手がめぐみの尻を撫で回したのだ。

触っている……

声がでない……

どうしよう・・・

そう思い悩んでいるうちに

「貴様！！痴漢だろ！！」

男の声がするとともに、悩ましい手は恵みの尻から離れた。

「イテ！！はなせ！！わしじゃない・・・」

その声を聞いたためぐみ、どこかで聞いたような気がした。

次の瞬間、電車のドアが開いた。

乗客たちが降りるのにまぎれて、後ろにいた男が逃げって行った。

その後姿、あのバーコードにめぐみは見覚えがあった。

人ゴミの中にまぎれて行くバーコード。

それを見て追いかけるのをあきらめ、うつむくめぐみ、

ふと目の前には男性の靴が見えた。

顔をあげると見知らぬ男が立っていた。

そう偶然にも助けしてくれた男も同じ駅で降りていたのだった。

そして

その男はめぐみに優しく話しかけてきた

「だいじょうぶか？」

「はい・・・」

「しかし、君も少しは、声をあげる・・・」

めぐみは、真っ赤な顔をして、

「すみません・・・」

かすかに声を出した。

しかし、その男がめぐみの姿を見た瞬間、

「男だったら、しっかりしろ!!」

やや笑みをうかべて、声を掛け、肩をポンと叩いた。

「ありがとうございます。」

めぐみが礼を言つとその男は去って行った。

朝から最悪だと思いつつ、会社に着いたためぐみ。

痴漢にあつただけでなく、男っぽい服装をしているとはいえ、

完全に、男として見られたことにも、かなりショックを受けた。

すぐさま、化粧をし、髪の毛を整えて、新しい部署にむかった。

今日から私は、変わるんだ・・・と

「今日から営業8課に配属になった飯塚君だ。」

「飯塚めぐみです。今日からこの部署に配属になりました。よろしくお願いします。」

さすがに、彼女に当たる目は、きつかった。ある意味厄介なものがきたという雰囲気はあった。

そんな中、めぐみが顔をあげて驚いた。

目の前には、さっき助けしてくれた男がいたのだ。

挨拶をしためぐみは、あまりの驚きに山下を凝視していた。

そして、なぜこんなところで会うのと今朝のことを思い出し、

胸の鼓動は高鳴り張り裂けそうだった。

「山下です。よろしく」

挨拶している山下を見てポーっとしているめぐみ

その様子を見て室長は声をかけた。

「飯塚君？」

「あっ・・・はい。よろしくお願いします。」

慌てて返事をするめぐみ。

その後、進藤、野本、長崎、そして奥山と挨拶が続いた。

一通り挨拶が終わって辺りを見回してみると

室長はすごく紳士的な中年のおじさま・・・リーダーの山下さんも
スラットしていて

かっこいい感じ、進藤さんは、ビシッとしっかりした感じ、そして、
野本さんは、

顔はいいんだけど・・・

女性では、長崎さんは、熟年のすごい色っぽい感じの人で、誰からも好かれている。

さすがみんなが羨む場所だとめぐみは改めて思った。

この部署のすごいところは、誰も浮ついたうわさがないことだった。

「奥山君、ここの部の内容を教えてやってくれ。」

室長に指示された奥山はめぐみを連れて行った。

「じつちよ」

彼女も社内では、男子に結構人気があり、女子からも慕われていた。

「さあ、仕事、仕事・・・」

それぞれは自分の机に戻った。

めぐみと奥山が廊下を歩いていると、急に奥山が立ち止まって振り向いた。

そして

「あなた、山下さんを見ていたでしょう。」

「えっ？」

「気があるの？」

「いえ、特に……」

「じゃあ……なぜ？」

「なぜって……」

「なぜ、山下さんを見てたの？」

「……緊張してたんです。」

「ほんと？」

「本当よ……本当に、気があるわけじゃないから」

「ほんと？」

奥山は、めぐみをのぞきこんだ、

「奥山さんこそ、何で、そんなこと聞くの？」

「いえ、彼、誰か好きな人がいるみたいだから忠告したの」

「えっ？」

「ところで、あなた本当に、あの部長をなくったの？」

めぐみは、コクリとうなずいた。

「本当に！、殴ったの、あのエロハゲオヤジ、私もお尻触られたことあるのすごいところあるじゃん・・・」

なんとか一日を終えためぐみ・・・

会社でめぐみはあのエロハゲ部長と何度か顔をあわした。

その度にエロハゲ部長は恵みのことを睨みつけてきた。

なんなのよ？あのエロハゲ部長・・・

このままじゃ・・・うつ・・・憂鬱・・・

この先が思いやられる。

そう考えるとめぐみは、朝と同じ格好で会社から出ることにした。

今日は、何とかなったなあ～

めぐみがそう思い駅に向かってしているとある女性が酔っ払いに絡まれているのが見えた。

「やめてください」

「いいじゃないか。どっかのスナックの姉ちゃんだろ」

彼女の手を無理やりひっぱる酔っ払い・・・

それを見ためぐみは、思わず酔っ払いの手をつかんで、

「いいかげんにしな！！！」

酔っ払いの手をひねり、そいつの顔を見た。

「いたた・・・悪かった・・・やめてくれ」

情けなく叫ぶ酔っ払い。

その顔を見てめぐみは驚いた。

そう・・・

その酔っ払いは・・・

あのセクハラ部長だった。

「見逃してくれ」

情けなく叫ぶセクハラ部長・・・

その光景を見ためぐみ・・・

その情けなさに、あきれた。

そして、つかんでいた手が少し弱くなった。

セクハラ部長は、その隙にめぐみを上を振り払い、体当たりして突き飛ばし、

「いたた・・・覚えてろ!!」

そう叫んで逃げって行った。

「あっ」

飛ばされためぐみは、少しよろめいた。

その時だった。

「なんで、手を離すんだ」

めぐみの後ろから声がした。

ふと後ろを振り向くとそこには、山下が立っていた。

「えっ」

めぐみと息を呑んだ。なんで？ここに山下さんがと驚いていると

「ありがとうございます。」

目の前の女性が例を言ってきた・・・

「あ・・・どうも・・・」

言葉が出ないめぐみをよそに、山下は、その女性の手をとって

その女性へ声を掛けた。

「大丈夫？」

「この人が助けてくれたの」

その女性が言うと山下は、めぐみの顔を見た。

そして、

何かに気づいたようだった。

めぐみが「山下さん」と言おうとした時だった。

「あゝ今朝、痴漢にあった！」

山下は笑いだし、めぐみの肩を叩いた。

そして、

「お礼は、後でします。ここへ連絡してください」

山下はめぐみに名刺を渡し、そこに、携帯番号を書き、その女性と去って行った。

二人は、近くのレストランで食事をしていた。

山下は、手を休め、その女性の方を見て

「優香さあ、いつ戻ってきたんだ？」

優香も山下言葉に手を止め、山下のほうを向いた。そして、ここに
かに

「一週間ほど前、日本に帰ってきたの」

「ふ〜ん・・・じゃあ、和食の方がよかったかな？」

「結構、おいしわよ。ここも、てっきり居酒屋へ連れて行かれるか
とと思ってたから。」

「それって、どういう意味だ？」

「だって、いつも同じ居酒屋ばかりだったじゃない。」

「そうだったかなあ〜」

「そうよ、確かこの近くだったわよね。」

「そうだよ。よく覚えているね。」

「何回行ったのよ。」

そう突っ込まれた山下は、少し頭をかいた。

「そうかな〜。ところで、光兄いとは、会ったの？」

その言葉を聞いた時、彼女の動きが止まった。しばらくして、

「まだ、・・・連絡はしてみたんだけど、出てくれなくて・・・それに、わたしから・・・一方的に別れたから・・・」

「だいじょうぶだって、優香が行ってからも、光兄いは、彼女も作らずまだ一人だから」

「でも・・・」

「がんばって、行っておいでよ」

そして、二人は店を出て、光兄いの家に向かった。

会社からの帰るめぐみ・・・

今日についてはなかったなあ・・・と思いつつ近所のコンビニに入った。

そこで島内を見つけた。

そして、

思わず声をかけた。

「島内さん」

買い物を終わらせた二人は、一緒に歩いていた

めぐみは今日の出来事をつい話してしまった。

その話を聞いて島内は思わず吹き出した。

「もつっ・・・」

めぐみがそう言ったが

しばらく笑いをこらえている島内

そして、

「ごめん、ごめん、あまりに面白かったもので・・・」

「わたし、おもしろくないんですけど・・・」

めぐみは、腕を組んで少しむくれた

「ごめん、ごめん・・・」

そう言って、しばらく、めぐみをジーツと見る島内

「どっしたんですか?」

その様子に戸惑うめぐみ・・・

「今の君を見て、

男と・・・

うゝむ・・・

確かに、男っぽいけど・・・」

島内がそうつぶやいた。

「ひどーい」と言いつつもめぐみは笑顔になっていた。

ある交差点で足を止めるめぐみ・・・

そのことに気づき、振り返る島内

めぐみは、自分が行くほうを指差し、

「島内さん、今日はありがとうございました。愚痴を聞いて
いただいて、わたし、こっちのほうなんで・・・」

ペコリと頭を下げた。

「そうか・・・じゃあ」

「はい・・・」

二人は、別々の道へ分かれて行った。

めぐみの足取りは、軽やかだった。

家に着くまでは・・・

玄関の電気というか、家の全部の電気が消えていた。

ドアノブに手をかけると

鍵も閉まっている。

「もう・・・」

めぐみは、仕方なく鍵を開け家に入る。

「ただいま」

電気をつけつつ、家の中を歩く

「誰もいないの？」

居間もキッチンにも誰もいない。

ふと弟の部屋を空けると

真っ暗な中……

泣き声がする……

弟は部屋で泣いていたのだ……

めぐみは、天を仰いだ。また、いつものことか……

弟の部屋の電気をつけ、泣いている弟の姿を見て、

ため息をついた。

そして

両手を腰にあて

「勇気い〜いるなら電気ぐらいつけなさいよ。」

めぐみの言葉を無視する勇氣。

「ったく・・・また、ふられたの・・・」

「ほっといてくれ!!」

「ところで、お父さんは？」

「お母さんを探しに行ったみたい。」

「また、いつものところ？」

「多分」

その頃、めぐみの父は、ある街角でボーと立っていた。

弟に近づくとめぐみ、にんまりと笑って

「本当に、ところで今度は、どんな人だったの？お姉さんが聞いてあげる」

「そういって、傷口をひろげるんだろう・・・自分は、彼氏もいないくせに」

「なによ・・・」

そう言って、勇氣の首を後ろからしめた。

「うっ・・・やめる・・・いたい・・・」

めぐみの騒動を思い出しつつ、家路についていた島内・・・

玄関の前まで行くと、優香が立っていた。

しばらく、立ち止まる島内

島内のほうをじっと見つめる優香・・・

そして

かすかな声で

「ごめん・・・」

そうつぶやいた。

あれは、2年前・・・

島内がプロポーズをしようと思っていた日だった。

優香は、自分の夢を追い、島内を置いてアメリカに旅立ったのだっ
た。

突如、目の前にあらわれた優香・・・

動揺する島内・・・

島内の脳裏には、別れた時の風景がよみがえってきた。

そして、

動揺し優香を直視できないでいたのだった。

しばらくして、

優香が「光一さん・・・」と話しかけようとした。

島内は、俯き優香を無視し家に入ろうとした。

その瞬間だった。

ある言葉が島内の背中をおした。

「会ったほうがいいと思います。」

気がついたら振り返り優香を抱きしめていた。

優香も彼に身を任せた。

しかし、

次の瞬間、優香を抱きしめていた手が彼女から離れた。

そして、

島内は、自分の気持ちを伝えた。

「ごめん 今日には帰ってくれ・・・」

その頃、めぐみは、悩んでいた

電話すべきかどうか

そして、自分が誰かという事を話そうかどうか

島内を見つめる優香、

その瞳にはかすかに涙が・・・

島内はその姿に言葉を失う。

そして

優香に背を向けた。

島内背中を見つめる優香

もう一度

「ごめんな・・・さ・・・い」

しかし

島内の背中が少しずつ遠くなる。

一歩、そして、また、一歩と

優香は思わずその背中に抱きついた。

「ごめんさい・・・本当に・・・」

動きを止めた島内

優香の手を見て、

ゆっくりとその手はずした。

「すまないが。今日は帰ってくれ。」

島内は同じ言葉をもう一度繰り返した。

再びゆっくりと歩き始める島内

そのまま家に入って行った。

それをただ見つめる優香・・・

瞳に溜まっていた涙がとめどなく流れていた。

家に入った島内、閉じた玄関にもたれかかり、

眉間にしわを寄せ、

うつむき、

頭に手を当て少し首を振った。

昔の記憶がよみがえる。

「私、留学したいの。」

優香の言葉に驚く島内、

「急にどうしたんだい。」

「前から思っていたの。」

「どうして、黙っていたんだ。」

「反対するでしょう?」

「それは・・・」

「やっぱり反対なんですよ。」

優香の言葉に戸惑う島内、

「ちょっと、考えさせてくれ。」

数日後、

やはり山内は優香と離れられないと思った。

そして、

留学に反対した。

結局、

二人の話は、平行線のまま、また数日が過ぎた。

島内は、ある決断をした。

明日、プロポーズしようとするれば、

彼女も思いとどまってくれるだろうと

「優香、明日あいているか？」

「ええ・・・」

「じゃあ。6時にかたつむりで待っている。」

「わかったわ。」

5時についた島内、その手には婚約指輪

そして、

優香を待った。

「お客様、これをお預かりしています。」

店員が手紙を持ってきた。

「これ？」

不思議そうにその手紙を見ると優香からだった。

光一さん、ごめんなさい。

わがままな私を、お許してください。

今日、旅立ちます。

優香

その手紙を見て慌てる島内、急いで空港まで向かった。

しかし、

その頃、優香を乗せて飛行機は、まさに離陸の瞬間だった。

「光一さん、ごめんなさい。」

そんな光景を思い出し、頭を抱え玄関に座り込む山内。

しばらく、

島内の家の前で、涙を流していた優香、ふと気付くと鼻血が出ていた。

彼女は、慌てて鼻血をふき取り、とぼとぼと家路についた。

いつものようにジヨギングへ出ためぐみ・・・

いつもの場所で島内を探した。

しかし、今日に限って、島内を見ない。

お礼の電話をすべきかどうか相談したかったのにと思っていたが・・・

まあ、こんな日もあるか・・・と思い

その場を去った。

会社に着いたためぐみ

昨日の今日ということもあり、心中穏やかではなかった。

そこへ奥山が挨拶をしてめぐみの横をすれ違った。

「飯塚さん、おはよう。」

「おはようございます。」

返事を返すめぐみ・・・

すると、奥山は振り返り

「どう？慣れた？」

「まだ2日目だし・・・」

その恵みの言葉を聞いて、奥山は小さくガッツポーズを見せ

「そうね。がんばってね。」

それに合せてめぐみも小さくガッツポーズをして、

「はい。」

そこへ、奥山を呼ぶ声が壁の向こうからした。

「奥山さん・・・ちょっと」

その声を聞いて、ため息をつく奥山

めぐみがよく見ると

壁のところから手が出ていた。

その手は手招きしている。

そして、

「奥山さん・・・ちょっと」

もう一度、かすかな声で奥山を呼んだ。

「どござ」

めぐみが言つと

「もう・・・と言いつつ、

ため息をついて、

奥山は壁の向うへ行つた。

そーっと覗くめぐみ

そこには

野本がいた。

「今晚、もし・・・」

野本がおどおどした様子で奥山に話しかけていた。

「もし？ねえ、なんなの？」

「あつ・・・いや・・・」

奥山の突っ込みに言葉がつまる野本、

「もし・・・よければ・・・今晚食事でも？」

「今晚？」としばらく考える奥山・・・

そして

「むり・・・」

奥山が言っていると野本は、

「そうですね・・・」

肩を落としてその場を去って行った。

その姿を見て、

また、

ため息をつく奥山、ふと見るとめぐみの姿が・・・

「見たわねえ」とめぐみの方に近づく

「あ・・・いや・・・わたしは・・・」

奥山は逃げようとするめぐみを捕まえ

「内緒よ・・・いいわね。」と耳元で言う。

「はい。」

「わかったわね。」

「はい。」

めぐみが2度目の返事をした時、

奥山の手がめぐみから離れた

そして、

「ところで・・・飯塚さん。勘違いしないで・・・」

そう耳打ちをした。

「はい？」

めぐみは、耳を疑った。

「えっ？野本さんとは？」

「別に……」

奥山の返事に首をかしげるめぐみ……

「えっ？じゃあ……」

「実は……」

「実は？」

「山下さんよ」

「えっ……山下さん？……」

「そう……えっ！……！！！」

「なによ、そんなに驚かなくても。」

「だって……それって……不倫じゃ？」

そうめぐみがつぶやくと奥山は、少し起こり気味に答えた。

「ばか……何言ってるのよ……山下さん、独身よ……女の子

に結構人気あるのよ」

ふうん山下さんって・・・まだ、独身だったんだ。

それにしても、奥山さん・・・

昨日は、否定していたくせに・・・

そういえば、山下さん・・・

確か・・・

かわいい彼女がいたし・・・

まあ、言わないほうがいいとめぐみは思いつつ

「でっ..」

「でっ..?」

「どっなの..?」

「それが・・・」

言葉に詰まった奥山は自分の席に戻って行った。

しほらくく..

「おほお..」

山下は少し機嫌が悪そうに事務所に入ってきた。

めぐみは、ドキドキしながら、仕事をこなした。

その中、山下と何度か話もしたし、顔をあわした。

しかし、山下は、めぐみのことについて気付いた様子は全くなかった。

仕事が終わりに後片付けをしていためぐみ

そこに野本が話しかけてきた。

「飯塚さん、今日はどうでした。」

「緊張しました。・・・」

にこやかに答えるめぐみ・・・

「ところで、今日は山下さんをよく見てただろう・・・」

野本はそう言っつてめぐみを驚かせた。

「いえ。そんな・・・」

めぐみは言葉を詰まらせ、返答に困った。

「山下さん、人気あるもんな・・・」

野本は、視線を山下ではなく、奥山へ向けた。

その視線の先を見ためぐみは、

「いえ。本当に、そんなことはないです。」

めぐみは、思いっきり否定した。

「本当？」

奥山に向けた視線を落とし、うつむく野本

そこへ……

「本当ですよ。ところで、野本さんは奥山さんに気があるの？」

めぐみの一言が、野本を驚愕させた。

「いきなり、何をいうんだ。じゃあー！」

そう言残し、野本は、慌ててめぐみの前から去って行った。

帰り際、目の前に奥山が立っていた。

「飯塚さん、今日は、山下さんを見ていたそうね。」

さっきの話聞いていたんだろうか……

それとも……

と思いつつ、めぐみは

「奥山さんが、朝からあんなこと言っし、山下さん……機嫌悪そうだし……」

初めての、わたしにどうしたらいいか？」と言葉を濁した。

実際、めぐみにとっては、昨日のことが気になって仕方がなかった。

しかし、ここは、話を変えねばと

「ところで、奥山さん、野本さんとは、どうなの？ 結構、話しているみたいだし。」

めぐみは話をそらした、

「急に何言うの？ まあ、ときどき、食事程度は……でも彼はセンスないでしょう？」

奥山がため息をつく

「じゃあ、山下さんは？」

素直に聞いてみると

「一度も……」

もう一度ため息をついた。

家に帰ったためぐみ・・・

やはり、連絡をすべきかどうか、迷っていた。

そこへ、勇気が入ってきた。

「兄貴」

「誰が兄貴だ？」

「格好が・・・」

そう話しかけ、途中でやめ、めぐみを指差す勇気

「どろいの意味よ・・・」

「髪の毛切ってから、ますます・・・」

「勇気！！」

その言葉に身構える勇気！！

めぐみは、怒ろうとしたが、

「とじろで・・・」

「あれ？」

拍子抜けした勇気・・・

「勇気・・・助けてもらった人にやっぱりお礼を・・・」

「また、そのこと?」

「うん・・・」

素直にうなずくめぐみ見て、

「その人のこと気になるんだろう?」

「勇気!!--」

「おおっと!!--やっといつもの兄貴に戻った。」

そう言って、ささっと逃げるドアを閉めた勇気。

「なによ!!--」

そう叫んで、バンと枕をドアに投げつけた。

再びドアが開き、ひょこつと顔を出す勇気

「兄貴」

「何よ・・・」

「お礼はしたほうがいいよ」

しばらく考えるめぐみ

「そつ？」

「素直になりなよ。」

そついい残し、勇気はドアを閉め、自分の部屋にもつどつた。

素直に・・・か・・・

うん・・・

まだ悩むめぐみだつた。

こうして数日がすぎた。

その間、朝のジョギングでも島内さんに会えなかった。

そして、めぐみは、思い切って山下に連絡をすることにした。

仕事が終わりに、携帯を片手にとるめぐみ・・・

えい・・・

「もしもし、どなたですか」

山下の声が・・・

その声になんか落ち着きをなし、

言葉に詰まるめぐみ

「先日の痴漢騒動で・・・」

めぐみは何かその一言を言った。

「あああーの！ー！」

携帯のむこうから山下の声がわらった。

「どなたですか。」

横から女性の声が入った、どうも奥山の声のようだ。

「えっと、ところで、どういった御用ですか。」

「先日の件で、こちらもお礼をと」

「そうですね。わたしも助けにいただいたお礼もしないと・・・ところで、お名前は、」

めぐみは名前を言うのを迷った。

しかし、

「飯塚めぐみです。」と本名を名乗った。

携帯の向うでは、まったく気付かない山下がいた。

そして、

横にいる奥山を見て、ちょうどいいと思い

「うちの社にもそういう名前の新人がはいたばかりです。ところで、今からどうですか?」

めぐみを誘った。

その言葉に驚くめぐみ

「えっ!?!今からですか?」

「暇だったら、どうぞです」

しばらく考えたためぐみは、山下と会うことにした。

「わかりました。」

「ちなみにどこにいます。」

「……の近くです」

「会社近くですね。ポンドという喫茶店がありますからそこで待ってください。」と電話を切った。

山下は、らつきーと思った。早速、近くにいた奥山に

「今日は、大事な客があるから、だめだ」

その場を離れようとした。

「さつき……ところで大事な客？」

奥山は浮かない顔をして聞いた。

「ちょっとした、いきさつでね、名前も、うちの課にきた。えっと」

「飯塚さん？」

「そう、同姓同名だって笑うよな」

奥山は、その名前を聞いて、めぐみを疑い、めぐみを探した。しかし、すでにめぐみは退社したあとだった。

めぐみは、出勤時と同じ男っぽい姿で、喫茶店で待っていた。

そこに、山下が入ってきた。

すぐさま、めぐみは、立ち上がり

「先日は、ありがとうございました。」

「こちらこそ、ありがとうございました。まあ、座ってください。」

二人は、挨拶を交わし席に着いた。

その瞬間に、めぐみは凍りついた。

奥山がこそつとその店に入ってきたのだ。

そして

こちらを見ていた。

注文を終えた山下は

「今日は、どんな用事で？」

「わたし、飯塚めぐみです。先日は助けていただいて、本当にありがとうございました。」

よし、これでわたしが、同じ会社の人間とわかったはずと思っていたら。

「こちらこそ、友人を助けていただいで、しかし、男の人の尻を触っていた痴漢も、痴漢だよな」と笑いだした。

その声が聞こえたのか、奥山はめぐみをもう一度確かめ店を出て行った。

めぐみはその姿を見ていたら、

「どうしました?」

「いえ?別に・・・」

「あの人でしょう?」

「ええ・・・」

「ちょうど、よかった。」

「なにが?」

「部下なんで、あまりむげにできないもので」

山下は知っていたのだ、奥山がついてきたことを、

「それにしても、何か武術をやったの?」

「すこし、合気道を」

「それで、酔っ払いを簡単に、ひねれたんか。けど、電車では」

「それは・・・いきなりお尻を触られて・・・気味悪かったんです。」

めぐみは、少し顔を赤らめた。

「ところで、あの酔っ払いは、」

「元上司です」と言ってしまった。

「あやしいだろ。」

「元上司だから、逃がしたんです。」

山下は、ある意味納得した。

「昨日も、今日も助けてもらった。」とつぶやいた

「なんですか？」

「いえ、いえ、今日の番号は、えっと飯塚くんのか？」

「そうですが・・・」

めぐみは、もう女に見られることをあきらめていた。

「たまたま、こうして会いませんか？」

「えっ……」

「今なんて・・・言いました？」

山下の言葉を聞きなおすめぐみ・・・

「だから、たまに、こうやって会わないか？」

「なぜ？」

不思議そうに山下を見つめるめぐみ、それを見て、山下はため息をついて

「奥山がうつとしいんだ」

そうこぼした。

「どうして？かわいらしい娘じゃないですか？」

「そりゃ、会社の同僚なんだ・・・」

「社内恋愛なんて普通じゃないんですか？」

「そうじゃなくて、」

「だったら、なぜ？」

「部署が同じなんだよ。」

「それが？」

そのめぐみの一言に、むっとした山下、

「あのなあ〜！お前の好きな娘が同じ部署にいたらどう思うっ？」

「どつって！！！わかりません。」

「みんなの前で、恥ずかしくないか？」

めぐみは、ふとその光景を思い浮かべた。

確かにみんなに見られているのは恥ずかしいと思った。

「でも、なんでわたしなんですか？」

「ちょうど、奥山も君の事を知っているから、都合がよい。」

「それだったら、この前の彼女がよかったんじゃないんですか？」

「優香は、無理だ。」

山下はむっとした。

「優香さんって言うんですか。あの人」

めぐみが言うと

「優香は、……えい、うるさい……。」と少しむきになった。

「では、これで・・・。」という声

「今日は、飲みに行こう・・・。」

山下は、イライラを吹き飛ばしたいと思いきめぐみを誘った。

「えっ・・・。」

「いらっしゃい・・・おっ？雄ちゃん・・・新しい彼女？」

その言葉にピクリと止まる山下・・・

「大将！！そりゃないよ・・・。」

そう言って、めぐみを指差す山下。

その行動を見て、

「どっという意味？」

そう突っかかるめぐみに対して

めぐみを見つめる山下、

その視線にドキッとするめぐみ

しかし、次の瞬間

「何だよー!!」

そう言っつてめぐみの頭を小突いた。

「痛いっつてばー!!」

そんな言葉を見無視して、山下は

「大将!! 席は?」

「いつもの場所が開いてるよ」

「ありがとう・・・行くぞ!!」

そう言っつてめぐみを先導する山下・・・

ただ、ついていこうとするめぐみがふと大将を見ると

大将はにこりと微笑み、小さくガッツポーズを見せ

そして、口パクで”がんばれ!!”とめぐみに言った。

何をがんばれというの?

と思ひながらめぐみは山下と同じ部屋に入っつて行っつた。

「カンパーイ」

二人はそう言っつて、飲み始めた。

しばらくして、

「あの〜」

「なんだ？」

「さっきの件ですけど・・・どうするんですか？」

「なにを？」

「だから・・・さっきの女性の件・・・」

「そうだな・・・」

そうつぶやいて、山下は、お酒を口にした。

ふと、めぐみのグラスを見ると空になっていた。

「まあ、飲め!！」

そう言ってめぐみのグラスに有無を言わずお酒を注いだ。

そして

「ん〜？　なんでつけ？」

山下も結構飲んでいた。

「何だっけじゃなく・・・」

「だから?」

「だから・・・こうしてたびたび会うんですか?」

「今日は俺のおごりだから・・・気にするな!!」

「そうじゃなくて・・・」

「とりあえず・・・カンパニー!!」

山下はかなり上機嫌で。乾杯をしてきた。

そして、自分のお酒を一气飲みし、再び注いだ。

こうして、この夜は更けた。

二日酔いの朝、昨日は、結構飲んだ。

昨日のことを思い出すめぐみ・・・

「山下さん・・・」

そのまま、居酒屋で寝てしまった山下

そこへ大将がその光景を見て驚いた。

「おや・・・珍しい」

「大将」

山下をゆすつていたためぐみが振り返かえった。

「寝ちまったのか」

「大将」

「とりあえずタクシー呼んどいたから、あと頼むは」

「えっ？」

めぐみの驚いた表情を見て

「何、驚いてるんだ」

「あの・・・」

「どうした。」

「わたし、山下さんの家知らないんです。」

「えっ？」

一度は驚いた大将だったが。しばらく考えて

「今日は、難しいから、これ・・・」

そう言つて、山下の住所を書いた紙を渡した。

「タクシーが来たぞ。」

その後、めぐみは何とか家に送り届けた。

翌日・・・

とりあえず、ジョギングに出ためぐみ

気持ち悪いと思いつつ、

ふらふらしていると、

ジョンを見た。

そして、ジョンに近づいて行った。

ジョンはいつもと違い激しく吠えた。

「ジョン！」

声をかけるめぐみにジョンはさらに吠えた。

ジョンと遊ぼうとしているめぐみに島内は声をかけた。

「めぐみちゃん」

「島内さん、おはようございます。」

けだるそうに返事をするめぐみの様子を見て島内は、

「めぐみちゃん、ひょっとして、二日酔い？」

「ええ、まあ……」

二日酔いがばれて、少しづつが悪そうに答えるめぐみ

「……」

「ところで、島内さんも、ここ数日会いませんでしたけど……」

「すこし……あってね……今日は、さすがにジョンに連れられてきたよ」

「なにか、あつたんですか？」

そう言つて、めぐみは島内を見上げた。

「そうだな・・・それより、めぐみちゃんこそ、何かあつたの？」

「いや・・・なんというか・・・ちょっと」

めぐみが昨日山下と会つたことを言つと

「本当に？」

島内は大笑いをした。

「あんまり、笑わないでくださいよ。」

「頭が痛いんだろう」

からかう島内

「もう・・・知らない」

少しむくれるめぐみ・・・

「でも、飲み過ぎないようにね。」

めぐみにやさしく微笑みかける島内

「ありがとうございます。」

事務所に入り机に座っためぐみ

やはりまだ頭が痛い・・・

そこへ奥山が事務所に入ってきた。

そして、

自分の机ではなく、めぐみの横に来た。

めぐみは緊張しつつ

「おはようございます。」

すると、奥山はめぐみの方を見て

「予定がくるっただから」

そう話しかけた。

めぐみは、ひょっとして気づいたの？

まずい・・・

どう言い訳しよう・・・

そういろいろ考えていると

「あなたと同姓同名のあの男に・・・」

奥山は、そう言ってめぐみの肩に手を置いた。

えっ・・・わからなかったんだ。ということは、本当にわかっていないんだ。

だったら、いいかこのままで・・・とめぐみは安心した。

そして、きつそうに、奥山を見上げるめぐみ、その姿を見て奥山が

「どうしたの？」

「あ・・・いや・・・」

「二日酔い？・・・男性社員ならわかるけど・・・」

「ちよつと・・・」

「気をつけなさいよ・・・ああならないように」

奥山は山下の方を指差した、

そこには、椅子に腰掛けポーっとしている山下の姿があった。

しばらくして、めぐみが廊下を歩いていると、

あの米山部長が目の前を歩いていった。

「おはようございます」「とめぐみが言つと

米山部長がめぐみに近づいてきた。

そして、

「なんだ！！その挨拶は！！」と急に怒り出した。

めぐみは思わず「すみません。」と謝ってしまった。

「とつとと！！やめてしまえ！！」と米山の大声が廊下に響く

その光景を見ていた山下、

「ちょっと待ってください。」と二人の間に割り込んできた。

「何だね、君は？」

「部長。今のは、おかしくないですか？」

「何！！貴様、わしに意見するつもりか！！」

「今のは、どうみてもおかしいですよ。みんな見えますし。」

と米山が辺りを見ると稀有な視線が米山に送られていた。

「挨拶がなつとらん！！」

「あんまり言つと、この間の件もありますし……」
と言つ山下の言葉に、米山はたじろいだ

「ふん!!、しつかり挨拶すように!!」

意味不明なセリフを残して、その場を去って行つた。

しばらく、固まっていたためぐみ……彼女を見て山下が

「だいじょうぶ?」

その言葉がめぐみを正気にさせた。

「ありがとうございます。」

「まあ……いって。今後気をつけるように。」

山下がめぐみの顔を見て

「なんか疲れた顔をしてるねあ……」

「あつ……いや……」

さすがにめぐみも二日酔いとは言えず

「そついう……山下さんも……大丈夫ですか」

「まあ……大丈夫だ……」

「飯塚さん、ちょっといい？」

山下が呼んだのは、めぐみが帰ろうとしたときだった。

「はい、」

めぐみは彼の横に行った。

めぐみの方を見た山下は

「ところで、仕事は慣れた？」

そう聞いてきた。

「はい、だいぶと。」

「じゃ、がんばって・・・俺もなぐられんようにせんとな」

山下の言葉に驚くめぐみ・・・

しびらしくして

「山下さん・・・なぐられたいんですか？」

逆にその言葉に驚く山下

「おいおい。また、部署かわりたいのか？」

「じょーだんですよ。やっと、なれてきたのに。」

めぐみは、自分の席にもどってきた。

そうすると、奥山が近づいてきて

「やさしいわねえ〜」

めぐみの耳元でチクリと言った。

「そうかな〜？どっちかといえば、気をつけているようで」

めぐみの言うことより、山下さんと馴れ馴れしいめぐみがじらやま
しい奥山

「いいわねえ〜」

思わずつぶやいた・・・

しかし、めぐみはため息をついて

「というか、前の部署の件もあるから・・・」

今日についてなかったなあと思いつつ歩くめぐみ・・・

十字路に差し掛かった時、

ワン！！

急に犬がほえてきた。

驚いためぐみが見た

よく見るとそこにはジョンがいた。

島内が散歩をしていたのだ。

「島内さん・・・」

「二日酔いはさめましたか？」

「はい・・・」

恥ずかしそうにうつむき、めぐみは答えた。

「ところで、島内さんどうしたんです？」

「ああ・・・今日は、少し早く終わったんでね。」

「そうですね・・・」

「少しお茶でもしませんか。」

「えっ？私ですか？」

驚くめぐみ

「そうですね・・・」

「でも・・・ジヨンは？」

めぐみは犬を指差した。

「大丈夫。お時間はありますか？」

微笑む島内

「ええ・・・まあ・・・」

めぐみは島内について行った。

そして

とあるドックカフェに二人は入った。

「こんなところがあるんですね。」

「まあ・・・」

「ところで、どうして私を？」

「この間、悩みを聞いてもらったお礼に・・・」

「お礼だなんて・・・」

少し照れるめぐみ、コーヒーカップに口をつけた

「で・・・どうなったんです？友人の話は？」

「それが・・・」

島内の言葉が止まった。

「それが？」

めぐみは、もう一度聞き返した。

ようやく重い口を開いた。

「会ったらしいんだけど、追いついたみたいなんだ。」

追いついたという言葉に、飲みかけていたコーヒーの手を止めた。

「・・・」

「で・・・とは？」

「その人はどうと？」

「返したことが正しいか、悩んでいるみたいなんだ。」

島内の言葉を聞いて、めぐみは持っていたカップをおいた。

そして、しばらく考えて

「うーん・・・悩んでいるんですか？」

「そう・・・みたいなんだ。」

めぐみは、少し頭を掻いた。そして

「ところで・・・その人は、元恋人がまだ好きなんですか？」

「好き・・・？あっ・・・いや、わかないんだ。」

「え〜！！わからないんですか。」

「そう・・・」

「じゃあ・・・会いたいと思わないの？」

「会いたい？・・・それもわからない・・・らしいんだ。」

「それは、本当に困りましたね。」

めぐみは、腕を組んで、また、しばらく考えこんだ・・・

その様子を見て島内は、

「めぐみちゃん・・・もう・・・いいですよ・・・」

そう言いかけた時、

「でも・・・追い返したことは悩んでいるんですけど・・・」

「え・・・」

「だから・・・その人は、追り返したことはないに悩んでいるんじゃない？」

「ああ・・・」

そういいかけた島内は、慌てて

「あ・・・いや・・・多分・・・その人は、そう思っている・・・」

「じゃあ・・・まだ、好きなのかも・・・」

めぐみは、組んでいた腕をはずし、少し身を乗り出し島内のほうを見た。

「えっ？」

めぐみの言葉に驚く島内・・・

「なぜ？・・・好き・・・て？」

「もし、嫌いなら、自分がしたことに迷ったりしないですよ。」

「・・・」

言葉が出ない島内に、めぐみは

「だから、もう一度、会ったほうがいいかも・・・」

そういって、再びコーヒーを飲みだした。

やがて、島内は

「そうか・・・ありがとう。友人にいつてみるよ」

ちょうどその頃、山下は優香と会っていた。

「光兄いも白状だよ・・・」

「そんなことを言わないでよ。」

二人は向き合って食事をしていた。

「で・・・俺は代役？」

「そんなつもりは・・・」

「いいよ。別に・・・」

「もう駄目なのかしら」

ため息をつく優香

「でも、顔もあわせてくれなかったわけじゃないんだろ。」

「ええ・・・まあ・・・」

「優香さあ、もう少しがんばってみたら？」

「わかったわ」

二人はそれぞれの家路に付いた。

家に戻った島内は、優香との楽しかったあの頃を思い出していた。

しかし、別れの場面がよみがえる。

どうしたらいいのか悩んでいた。

そんな時、

「まだ・・・好きなのかも・・・」という声がした。

そして、

気がつくとも島内は、優香の家に向かっていった。

優香の家のインターホンの音が鳴る。

ホーン越しに、島内を見つけた優香。

ドアを開けた優香は、何も言わずに島内に抱きついた。

そして、見つめ合いキスをした。

その日、二人は、一緒にすごした。

お互い理由を聞くことも無く・・・

そして、今まで離れた時間を取り戻そうと・・・

数日後、会社からの帰り道、めぐみは、ジョンと散歩する島内を見かけた。

「こんばんは・・・」

島内が挨拶する間もなく、めぐみは、ジョンに目をやり

「ジョン、こんばんは・・・」

じゃれていた・・・

ふと、そこには、見慣れない人が・・・

「こんばんは・・・」

その声を掛けてきた。

めぐみは、その人を見て驚いた

先日、助けた女の人立っていた。

しかも、島内と仲良く腕を組んでいた。

「こんばんは・・・」

めぐみが顔をあげると、

その女性は、気づいたのか。

「あっ……あなた、あの時の……助けてくれた……あの時は、ありがとうございます。」

「ええ、まあ」

めぐみは浮かない返事をした。

その光景を見て島内が驚いた。

そして

「ひょっとして、二人は、知り合い？」

島内が聞くと

「ええ、この間、助けてくれた人よ。話したでしょ。酔っ払いに絡まれてって……」

その女性が答える

「ああ……！あの時の」

島内はにこやかにめぐみの方を見る

「ところで光一さん、誰……なんで、知っているの？」

女性は島内に耳打ちをした。

「わたし、飯塚めぐみです。」

めぐみがと言つと、

「めぐみくんって、強いわよね」

その女性は、めぐみを見ながら一回りした。

「わたし、大橋優香、よろしく・・・」

手を差し伸べる。

それに答えるようにめぐみも手をだした。

「よろしく」

「光一さん、何で言ってくれなかったの？」

「毎朝会う、元気のいい子がいる。っていつてなかったっけ」

「あゝ、あの子ね、」

「きみが助けた女性が、優香とは知らなかったんだ。改めて俺から
も礼をいうよ。ありがとう」

「いえいえ。とんでもない。たまたまですよ。これで、邪魔者は消
えます。ジョンまたな」

そついい残して、めぐみは、去っていった。

友人の話は、島内さん自身の話だったんだ……

あんなきれいな人と……

山下は、優香のところに遊びに行った。

そこには、島内がいた。

「何だ。仲直りしていたんだ……心配して損した。」

山下は、少し寂しげに言った。

「そうそう、あの子にあったわよ。」優香が山下に言った。

「えっ？」と聞き返すと。

「この間、わたしを助けてくれた子。」

「あっ……あゝあ、」

「えっ……と、」と名前を思い出す優香

「飯塚……」と山下が言うと

「めぐみくん……！」と喜び、話をつづけた。

「聞いて聞いて。なんと、彼ねえ、光一さんと知り合いなんだって

え」と

山下は、光一の顔をみて、

「本当？」

「ああ、」

しばらく3人の会話は続いた。

やがて、

「そろそろ、かえるは、」

山下は席を立った、

「もう少しいても……」

「じゃ、」

「それじゃ……」

外に出た山下は、ついていないあくと空を見上げた。

ふと目の前には、ジャージ姿のめぐみが走ってきた。

「なんで、お前が目の前にいるんだ？」

めぐみを見た山下の一言だった。

「いるんだとはなんだ」

めぐみは、思わず言い返してしまった。

「ほら・・・」といつと

ポツリ、ポツリと雨が降り出してきた。

やがて雨は、土砂降りになってきた。

「俺の家が近いから・・・」

山下は、めぐみを引っ張っていった。

びしょ濡れのふたり

「ちよつとまつてる。」

山下は、玄関にめぐみにを待たせた。

しばらくして、上半身裸になった山下があらわれた。

「うわ〜」と驚いためぐみに

「何を驚いてんだよ、これも着てる」とタオルと服を渡した。

それを見るめぐみ、山下の方を見て

「洗面所借りてもいいですか？」

「いいよ」

めぐみは、洗面所で着替えていた。

上着を着替え、ズボンを脱いだとき、

ガチャと山下がはいつてきた、

「キャッ」

声をあげためぐみ

「なにが、きやっただよ。男のくせに・・・」

山下は、上は白い大き目のYシャツ下は、何もはいていないめぐみの姿を見て、

少しどきっとした。

「ちょうど、今から、飲みたいから・・・付き合え。」

そっぴい残して洗面所を出て行った。

しばらく、めぐみは動悸がおさまらなかった、

というより、

何でこんなに、セクハラを受けるの?と思っていた。

そして、深呼吸して、洗面所を出た。

めぐみが山下の前に座ると

「ほら」

山下が缶ビールを差し出した。

「今日は、元気ないですね」

めぐみが聞くと、

「うむ」

「この間の彼女とはどうだったんですか？」

しらばく、めぐみをにらむ山下。

「なっ……なによ。」

めぐみは、立ち上がり山下の方へ動いた。

それを見て、はあくため息をし、山下はつぶやいた。

「ずっと……俺の片思いだったんだよ。」

「片思い……か」

めぐみは、山下の横に座り、山下と優香のことを思い出した。

缶ビールをグビと一口飲み……

「はあく」とため息をついた。

無言でめぐみの方を見る山下、

そして、

「お前こそ、何だよ。ため息なんかついて。」

「あっ・・・いや・・・なんでもない・・・」

めぐみはあわてて

「で・・・告白するのっ」

聞き返した。

「・・・」

「告白するの。」

「それは・・・」

「じゃあ、あきらめるの」

「誰が」

山下は少しにらんだが、すぐになしそうな顔をして、

「そうだな」

その言葉を聞いて、

あの二人、お似合いだもんな

それに、私の入る隙間もなさそうだしと思い再びため息をついた

「何、ため息をついてるんだ。」

「あ……いや……」

めぐみが戸惑っている時、携帯がなった。

「ちよつと……」

携帯をとるめぐみ

「はい、？……雨がやんだら、かえるから……」

と話を終えた。

「だれ、彼女？」

興味本位に聞く山下。

「誰でも、いいじゃないですか。ところで本当にあきらめるんですか？」

めぐみが切り返した。

「そうだなあ、あきらめるか。」

「だったら、あの娘なんかどうです？」

「あの娘？」

「この間、喫茶店に来ていた……」

「あ、奥山……奥山は、無理だ。」

山下が言った後、しばらく考え込んだ。

ふとあることを思い出し、

そして

めぐみをじっと見た。

めぐみは山下の行動に躊躇して、

「なんですか。私の方を見て」

「飯塚、お前、実は女ということにして、俺の彼女をやってくれな
いか」

「はあ？」

その言葉を聞いて驚くめぐみ

「奥山は、部下だし、むげに断れない。」

「なら、なおさら、こんな方法は、無理じゃないですか。それに、
わたしは、女です。」

山下は、もう一度、めぐみをジーと見た。

「な・・・なによ・・・」

しばらくして、めぐみの頭をバチッと叩いた。

「いた〜い。なにすんのよ。」

めぐみは、叩かれたところを両手で押さえた。

「何を言ってるんだ、どう見ても男だろ。」

山下は頭を抱えたためぐみを見て言った

「いたた・・・」

言いつつ、めぐみはため息をついて、

「好きになってくれる女性の方がいいんじゃないんですか。」

「いやなんだよ、あいつだけは、手伝ってくれんのか？」

「それが人に頼む態度ですか？」

めぐみは断ろうとした。

すると、山下は、両手をあわせて

「頼む、この通りだ。」

「本当に、彼女が嫌いなんですわね。」

「ああ」

「どうしてなんです？」

「そこまでいわないとだめか？」

「まあいいですけど……、いたずらに傷つけても効果ないよ……」

「じゃあ、どうしたら……」

山下は考えていた。

「じゃあ……」

めぐみはあくびをした。

ふと、山下がめぐみに目をやるとうとうとして、今にも眠りそうだった。

おとこのくせに、かわいい寝顔をしてやがる……

気が付くと、じっと、めぐみを見つめていた。

しばらくして、いかにいかんと思いつめぐみから離れた。

翌朝、いつもの通り男装をして会社に出た。

そして、会社に着くと着替えを済ませて事務所に出た。

「今日は1番か」

やがて・・・

「おはよう」

野本があらわれた。

「おはようございます。」

次に、奥山があらわれた。

「おはようございます。」

そう言っつて、めぐみが二人の様子を見ていると

野本は、奥山を誘って、何かを話しているようだった。

「奥山さん？お誘いですか？」

めぐみは、戻ってきた奥山に話しかけたが、

奥山は、いい顔をせず、黙って・・・

ゴンー!!

「痛い!?!」

めぐみの頭を叩いて、何事もなかったように自分の席に座った。

昼休みになって、めぐみの目の前にやってきた奥山

「めぐみ、ちょっといい?」

めぐみを昼食に誘ってきた。

近くのカフェに行き、ランチを囲む二人・・・

「あゝ・・・」

めぐみから話し始めようとしたら、

「このランチ、おいしいでしょう。」

奥山はめぐみの話をさえぎった。

そして、ため息をつく、奥山

「どづしたんですか?」

めぐみの言葉に、チラッとめぐみを見て視線を落とす奥山

再びため息をついた。

「どうして・・・山下さんじゃなくて、野本くんなの？」

奥山の独り言に、取り残されたためぐみ・・・

「あゝ・・・」

その声を聞いて、めぐみがいるのを思い出した奥山

「もう・・・だめなのかしら？」

そうつぶやいた・・・

「奥山さん、どうしたんですか？」

めぐみの顔を見た奥山・・・

「めぐみどう思っつ？」

こんな言葉をめぐみに投げかけた。

「何を？」

「山下さんよ」

「山下さん？」

「そうよ・・・いくらわたしが誘っても・・・」

その言葉を聞いて、山下が奥山をうつつとおしいと思っていたことを思い出した。

「奥山さん・・・本気なの？」

「そつよ・・・」

そう言ってため息をつく奥山・・・

「もう・・・無理なのかしら・・・」

「山下さんって彼女いるんでしょ？」

「いないわよ！！・・・たぶん」

めぐみの言葉に自信をなくす奥山・・・

「ところで野本さんはどうなの？」

「ぜんぜん、だめよ・・・」

めぐみにして見たら驚きの一言だった。

野本自体も社内の女の子の中では、結構人気があるほうだったからだった。

「どつして？」

「仕事では、そんなことないんだけど・・・」

「けど・・・」

「実際に、話すとなんとなく頼りなくっ・・・」

そう言っただたため息をついた。

「頼りないって・・・」

「なぜ、そんなことを聞くと、めぐみ・・・ひよとして・・・」

「あっ・・・いや・・・野本さん、今日も奥山さんを誘っていたですよ。だから・・・」

「そうなの?」

すこし疑り深い目でめぐみを見る奥山・・・

「ところで、山下さん・・・」

そうめぐみが言おうとしたが、奥山の悲しそうな様子を見ると

言葉が出なかった。

しばらくして・・・

「えっ・・・なに?」

ようやく反応があった奥山・・・

家に帰ったためぐみ・・・

どうしたらいいんだろう。

このままだと単に奥山さんを傷つけるだけだし・・・

「何してんの？」

そこへ勇気が入ってきた。

「あ・・・いや・・・」

「珍しく悩んでんの？」

「どっこういう意味よ・・・」

「また・・・あのエロハゲ親父？」

「関係ないでしょ・・・あなたには・・・」

「ひょっとして・・・恋の悩み・・・」

勇気の一言にしばらく言葉を失うめぐみ

めぐみの様子を見て、勇気は

「本当？」

めぐみを指差して言うと

「ちがうわよ・・・」

「ひょっとして・・・凶星？」

「うるさい！！」

そう言って、クッションを投げつけるめぐみ

「おおっと！！」

クッションをよける勇氣、ふとめぐみを見る

「アニキ・・・どうしたんだ・・・」

いつもなら怒るめぐみだったが、ため息をついた。

それを見て、勇氣は、めぐみのそばに来た。

「どうしたんだよ。」

「うーん？勇氣・・・」

めぐみは、山下が自分を使って奥山にあきらめさせようとしていることを勇氣に伝えた。

そのことを聞いた勇氣の一言目にめぐみは、怒った

「へえ・・・物好きもいるのだ」

「なによー!」

「っていうか・・・本当にいくかな?姉貴みてー!」

「ちよつとおくー!いいすぎじゃない?」

「まあ・・・今の姉貴じゃ・・・わからないだろう」

「で?」

「とりあえず・・・姉貴・・・ママ・・・やったほうがいいんじゃない?」

「それって?」

「まあ・・・やってみたら?」

「どついう意味?」

「今の姉貴じゃ・・・大丈夫・・・」

「そう・・・?」

「俺・・・一番方法だと思っけど・・・」

「なぜ?」

不思議そうに声をかけるめぐみ・・・

「ゲイと思ったほうがましじゃん。」

「誰が!？」

そう怒るめぐみを尻目に、勇氣は部屋を出て行った。

山下からメールが入ったのは数日後の金曜日のことだった。

内容は、お誘いの電話をしてくれた。

ふと、山下の席を見ると奥山が話しかけていた。

めぐみは、こっそりと、事務所をぬけた。

外から事務所内をこっそりと見るめぐみ

そして、携帯をかけた。

「もしもし、・・・山下ですけど」

「もしもし、飯塚ですけど、今日あいてますか?」

「ええ、いいですけど・・・」

「19:00に駅前で・・・」

「ええ、いいですよ」

めぐみが事務所に戻ると、山下はうれしそうに顔をしていた。

「今日もだめなんですか。」

奥山の声がした。

「そっだよ・・・、今日は約束があるんだ。」

山下はうれしそうに言い返した。

「飯塚って人ですか？」

「そっだよ・・・。」

奥山もさすがにあきれた。自分よりあの男のほうがいいなんて、

戻ってきためぐみに視線が集まる。

「飯塚さん、いつから山下とつきあってんの？」

野本がめぐみに聞いた。

「なっ・・・なによ・・・？」

「あやしいなあ？」

野本がめぐみに問いかける。

「同じ飯塚でも、男よ」

そのうしろから奥山が言った

「なんだ・・・」

野本は悔しそうだった。

廊下で、野本を見つけたためぐみ

野本をリフレッシュルームに連れて行った、

「野本さん、あなた、奥山さんが好きでしょう。」

「な、なにを言うんだ・・・」

野本は突然の話に驚愕の顔を見せた。

「ふうん、わたしから言っただけでしょうか」

「余計なお世話だよ・・・」

野本はやや怒り気味に顔を背けた。

めぐみは、顔の正面に立ち

「めがね取ってみて、」

「な！なんだよ」

「いいから」

「たくつ・・・なんだよ」

仕方なく眼鏡をはずす野本。

「背筋伸ばして・・・」

野本の顔立ちを見て

「ふうん。じゃあ、今日でも思い切って告白すれば？」

「何を急に・・・無理だよ」

驚き戸惑う野本・・・

「何が、無理なのよ、好きなんでしょ？」

めぐみの言葉を聞いてため息をつき

「あいつ、山下さんが好きなんだよ・・・」

そうこぼした。

その言葉に、めぐみは、少しむっとした。

「何が、あいつは・・・なの、本当は好きなんでしょ？だからちよ

くちよく、食事誘うんでしょ?」

「……………」

とうとう野本はうつむいてしまった。

「協力しましょうか?」

「えっ…………なぜ」

「好きなんでしょ?…………ただ、それをほっておけないから……………」

そう言っつて野本にメモを渡した

「これはなに?」

「このメモに20:00海浜公園の時計前で待つに書いて」

「なんで……………」

「本当は、今日お誘いしてたんでしょ?」

「しかし、さつきも見ての通り、山下さんを誘っていただろ。」

「でも、無理だったでしょう、今がチャンスなんだけど……………」

「本当か……………」

少し喜ぶ野本

「奥山さんの机においてあげるから・・・本当は、野本さんの口からいえばいいんだけど。」

「この間、断られているから・・・いえないよ」

「だからメモを置くの・・・それと、格好が今のままだと少し問題があるからフランって美容院
いってみて!、これ」

そして、フランの場所と連絡先の書いてあるメモを渡した。

「えっ、このままでいいだろ。」

「だめ」

かなりきついだめ出しするめぐみ

「たまには、イメチェンも大事だから・・・じゃあ、健闘を祈ります」

奥山が、机の上に戻ると、メモがあった。20:00 海浜公園の時計前で待つと、

「めぐみ、このメモだれ？」

「さあ、わたし、帰ってきたら、置いてあったわよ。」

「この字は、多分、野本さんね・・・」

「もしもし・・・山下ですけど」

「もしもし、飯塚ですけど、今日あいてますか？」

「ええ、いいですけど。」

「19:00に駅前で……」

「ええ、いいですよ」と切れた。

事務所に戻ると、山下はうれしそうな顔をしていた。

「今日もだめなんですか。」と奥山の声がした。

「そうだよ……今日は約束があるんだ。」山下はうれしそうに言い返した。

「飯塚って人ですか？」

「そうだよ……」

奥山もさすがにあきれた。自分よりあの男のほうがいいなんて、

戻ってきためぐみに視線が集まる。

「飯塚さん、いつから山下とつきあってんの？」と野本がめぐみに聞いた。

「なっ……なによ……?」

「あやしいなあ?」と野本がめぐみに問いかける。

しかし、野本の後ろから「同じ飯塚でも、男よ」と奥山が一言
「なんだ・・・」と野本は悔しそうだった。

廊下で、野本を見つけたためぐみは、

「のもとさん・・・」と声を掛け、リフレッシュルームに連れて行
った。

「野本さん、あなた、奥山さんが好きでしょう。」

「な、なにを言うんだ・・・」

野本は突然の話に驚愕の顔を見せた。

「ふ〜ん、わたしから言っただけでしょう？」

「余計なお世話だよ・・・」やや怒り気味に顔を背けた。

めぐみは、顔の正面に立ち

「めがね取ってみて、」

「な！なんだよ」

「いいから〜・・・」

「たくつ・・・なんだよ」

仕方なく眼鏡をはずす野本。

「背筋伸ばして……」

野本の顔立ちを見て

「ふうん。じゃあ、今日でも思い切って告白すれば？」

「何を急に……無理だよ」と野本が驚く

「何が、無理なのよ、好きなんでしょ？」

ため息まじりに一言

「あいつ、山下さんが好きなんだよ……」

めぐみは、少しむっとして

「何が、あいつは……なの、本当は好きなんでしょ？だからちよくちよく、食事誘うんでしょ？」

「……」と野本はうつむいてしまった。

「協力しましょうか？」

「えっ……なぜ」

「好きなんでしょ？……ただ、それをほっておけないから……」

とメモを渡した

「これはなに？」

「このメモに20:00海浜公園の時計前で待つと書いて」

「なんで・・・」

「本当は、今日お誘いしてたんでしょ？」

「しかし、さつきも見ての通り、山下さんを誘っていただろ。」

「でも、無理だったでしょう、今がチャンスなんだけど・・・」

「本当か・・・」と少し喜ぶ野本

「奥山さんの机に置いてあげてから・・・本当は、野本さんの口から言えればいいんだけど。」

「この間、断られているから・・・言えないよ」

「だからメモを置くの・・・それと、格好が今のままだと少し問題があるからフランって美容院行ってみて！これ」

とフランの場所と連絡先の書いてあるメモを渡した。

「えっ、このままでいいだろ。」

「だめ」とかなりきついため出しするめぐみ

「たまには、イメチェンも大事だから・・・じゃあ、健闘を祈ります」

奥山が、机の上に戻ると、メモがあった。20:00 海浜公園の時計前で待つと、

「めぐみ、このメモだれ？」

「さあ、わたし、帰ってきたら、置いてあったわよ。」

「この字は、多分、野本さんね・・・」

仕事が終わりに、野本はわけがわからないまま、めぐみが言った美容室フランに行った。

そこには、めぐみによく似た人物がいた。

どちらかというところ、めぐみより体格は、少しよく、

長髪のせいかなんとなくめぐみよりかわいらしい感じがした。

「あ、いらっしやい、ねえさんから聞いているよ。・・・」

駅前で、誰かをまつている山下・・・そこにめぐみがあらわれた。

「ごめん、待った?・・・」

「いや・・・」

笑顔になる山下、

めぐみは、山下の手をとった

「どうして?」

その行動に戸惑う山下、彼がボーっとしている様子を見て

「山下さん?」

言うめぐみ言葉にわれにかえり

「あっ・・・じゃあ・・・とりあえず、食事にしよう。」

二人は、近くのパスタ屋へ入った。

「カンパニー」

赤ワインの入ったグラスがチンとなり、少し口に含んだ。

前菜を食べつつ、めぐみが「恋人同士にみえるかな？」とこそっ聞いた。

「めぐみ・・・奥山が聞いてたらどうするんだ。」

「でも、奥山さんいないみたいですよ。それより、どうなんです？」

「ったく・・・、どちらかというと、親友同士かな？」

「えっつ、じゃあ、奥山さんが見ても、信じないじゃないの？」

山下は、恋人だと言いたいけど・・・男同士だと思つと言葉に詰まった。

「やはり、親友かな？」

めぐみは、少し頭を下げ、上目使いで言った。

「演技でも、彼女くらい言ってほしいんですけど・・・」

「じゃあ、ガール……」

「ガール……て逃げてませんか。」

「マイフレンドだ……」

山下にとっては、苦し紛れの一言だった。

「マイフレンド……か」

うつむいてため息をついたためぐみは、

「まあいいでしょう。今日は楽しみましょう。ねえ、折角の初デートだし、マイフレンド やましたさん」とにこやかに話し始めた。

「初デート？」と山下は驚いた。

「そうですね、初めてでしょう、こんなふうに会って話したりするのは」

そうかデートなんて……男同士だけど……そうだ楽しまないと山下は思い……

「そうだな」

お互い本当に食事と会話を楽しんだ。

近くの海浜公園へ向かう二人、

その頃予定より少し前に海浜公園の入口にある時計台に着いた奥山は、

こんな時間に野本さん一体どういうつもり・・・と思いながらも半分期待しつつ、野本を待っていた。

ちょうどその時、時計台の前を仲良く並んで歩く山下とめぐみの姿を見つけた。

一方、二人は、奥山がいるのを確認し、心の中で、よし・・・とガツポーズを決めた。

えっ山下さん 男と楽しそうに歩いてる・・・と奥山はしばらく驚いていた。

どうしよう、本当かどうか確かめたいと奥山は二人についていった。

その頃、めぐみと山下は、さっき見た奥山はついて来ていると思っていた。

高台のベンチに座り、眼下の夜景が二人を別の世界へ連れて行った。

「やましたさん・・・夜景・・・」

「ああ・・・」

山下は、酒を飲んでいた勢いもありめぐみの肩をそっと抱いた。

めぐみも肩をよせ頭を山下にあずけた。

しばらく、二人だけの時間が流れた。

ふとめぐみを見つめた山下……

めぐみも見つめなおす……

「ちょっと……」とめぐみが何か言おうとした時、山下は、

めぐみの顔を真剣にみつめ……キスをした。

その光景を見てしまった奥山は衝撃を受けた。

私より……あの男のほうがいいなんて……

そして、わけもわからないままその場からにげた。

もう……最悪！！なんとも言えない悲しみと怒りが同時に

こみ上げてきていた。

しばらく、走った奥山……気がつく時計台の前にいた

目の前に見慣れない男が立ち、奥山をじーっと見つめていた。

その男に視線が気になった奥山。

しかし、その男を無視してその場を去ろうとしたとき、

「ちょっと、待って!!!!」

その言葉に驚き立ち止まる奥山

そして振り返り、

「あの私に用ですか？」と聞いた。

その男は、一言

「来てくれたんだね。」

奥山は、その声には、覚えがあった。

「本気なんだ、付き合ってくれ……」

「なんで、あんたなの？……」と奥山は泣き崩れ、野本の胸にもたれかかった。

まさか、キスまでとは……これには、めぐみも予想外だった。

「山下さん、度が過ぎます……」と言ったが、

山下は、「たかがキスじゃないか……」とかなりうれしそうだった。

「とりあえず、これで、奥山も、近寄らないだろう……」

もうつずるいんだからと思いい山下を見つめるめぐみ

機嫌をよくした山下は、めぐみの姿を見て、

「行くぞ。」

「どこへ？」

質問するめぐみを引っ張って、いつもの居酒屋へ有無をいわず連れて行った。

翌朝、二日酔いが二人を襲った。

二日酔いの朝、

めぐみはそのつらい頭に耐えつつ、洗面所で歯磨きをしていた。

ふと、鏡に映る自分を見て、昨日のことを思い出した。

きれいな夜景の中、近づく山下の顔、

そして、

触れた唇、その感触がよみがえる

気付かないうちに、自分の唇を触り、昨日のことに、胸が熱くなっていた。

「姉貴!!」

そこへゆうきが大声で洗面所に入ってきた。

「わあ!!」

めぐみが驚いたとたん、急激な頭痛がめぐみを襲った。

「何驚いてんだよ。」

そこには、頭を抱え、うずくまっているめぐみの姿があった。

「姉貴、飲みすぎんなよ。」

その姿を見てたゆつきは、そういい残し、その場を去って行った。

もうっ・・・頭が痛いんだから・・・と叫びたいが、ただ頭痛に耐えていた。

しばらくして、痛みが鎮まった。

すると

またさっきのことを思い出し、あゝと頭を振った。

そして、とりあえずジョギングに出かけた。

その頃、目を覚ました山下

彼もまた、二日酔いに襲われていた

その、朦朧とする意識の中、ふと昨日のことを思い出した。

公園で・・・そう・・・キスしたんだよな。

そう思うとめぐみの顔が急に浮かんできた。

そして、胸が急にカーツと熱くなってきた。

俺は一体どしたんだ？と戸惑い始めた。

あいつは・・・？

結局、ほとんど動けなかっためぐみ

ようやく、動けたのは夕方になってからだった。

とりあえず、DVDを近所の店まで返しに行った帰りだった。

ふと、木の陰に隠れ躊躇している山下の姿を見つけた。

彼の視線の先には、犬を連れて仲良く歩く、島内と優香の姿があった。

めぐみはその光景を見て、

無理だよ。

心の中でつぶやいていると

山下はため息をついた

そして、振り返り、めぐみの方に歩き出した。

「山下さん！！！」

それを見ためぐみは声をかけた。

その声に気付く山下、島内よ優香もめぐみの方を見た。

「こんにちは。」

「ああ・・・」

めぐみの挨拶に気のない返事をする山下。

「こんにちは。」

そこへ優香と島内が入ってきた。

「光兄い・・・」

山下が話しかけている光景を見てめぐみは、不思議そうに山下を見た。

「二人は知り合い？」

肘で山下をつつき、めぐみが聞くと

「そうだよ。」

あっさりとした返事が返ってきた。

「どんな？」

「いとこだよ。」

「えっく！..!」

驚くめぐみ、

その声にジョンがめぐみに向かって吼えた。

「うるさいぞ。ジョン・・・」

島内はジョンを叱った。

しよぼくれるジョンに

「驚いただけなのにねえ」

そう言って、めぐみはジョンに近づき頭をなでた。

しばらくして、

「じゃあ・・・帰ります。」

めぐみは、その場を去って行った。

そうかそれで優香さんとの恋は、無理って言っていたのか。

そう思った時、めぐみの脳裏にあのときの寂しそうな山下の顔が浮かんだ。

早い時間帯の電車に乗った山下は、

偶然にもめぐみを見つけ山下は声を掛けた。

「めぐみ!!--」

「やましたさん。おはようございます。こんな早くに・・・」

「こんなに早い時間に通勤か?」

「はい。この時間だと電車もすいてるし、痴漢もないし」

「そうか・・・」

「モーニングでも・・・」

二人は同じ駅で降りると山下が誘ったが、出勤なんでと断られた。

山下と別れたためぐみ、少し時間をずらして入社した。

午後になって、珍しくあのセクハラ部長が営業8課にきた。

何でも、めぐみが前にやっていた仕事のミスで損失があったと文句を言いに来たというのだ。

営業8課室長を前にして、セクハラ部長が話を始めた。

「おたくの課にいった飯塚君の件で、我が部は、損失をこうむった。だから」

「少なくとも、今回の件については、飯塚君の責任だ、こちらで処分をしたい。」

「米山部長、気はたしかですか？」

「なに、」

「これは、越権行為でしょう。」

「なんだと、部長会にかけてもいいんですな？」

米山は鼻息を荒げた。

「飯塚がこちらへ来てだいぶたちます。実際に、飯塚がその仕事をしたという証拠も無い。ましてや、米山部長の管理責任の問題を、こちらへふるのですか？」と言いつ返した。

「なにを・・・」

「しかも、飯塚は2級社員です。責任は、ありませんが・・・」

「だから!?!」

「それを理解してますよね？」

「ほう、私にそんなことを言うのかね？君は」

「じゃあ・・・米山部長が我が部への越権行為についてを部長会にかけますがいいですね？」

「どつやって？」

室長がそつとICレコードを取り出す。

「貴様！・・・！」

怒り室長の胸倉をつかんだ米山。

室長は、右手である方向を指差した。

「なにかね。」

その指指した方向を見ると、ビデオカメラが設置されていた。

「いいんですか？そんなことをして、セクハラで問題起こしといて、また、問題起こすのですか？」

「くそつ・・・」

米山は、その手を放し会議室から出てきた。

そして、めぐみをにらみつけ、営業8課から出て行った

「室長、ありがとうございました・・・」

「いや、たいしたことない。しかし、すこし事情は教えてくれ・・・」

「・

「わかった。確かに飯塚くんには、落ち度がない」

やがて、室長は静かに考え始めた。

帰りが遅くなったためぐみは、ウィッグや化粧を落とさず、とりあえず服だけを着替えて帰ることにした。

その頃会社を出た山下は、少し前にめぐみがいるのを見つけた。

声を掛けようとしたら、めぐみの周りには、数人の男が立ちほだかっていた。

「なにをするんですか。」

やがて声がして、めぐみを路地裏へ引き込もうとした。

山下は、めぐみを追いかけて走っていった。

「貴様、会社をやめろってんだ・・・」

数人に囲まれたためぐみ

「いやです。あなた達誰なんですか？」

そう言いつつ、携帯メールで勇気に助けを呼んだ。

「関係ないだろう。」

手を上げた瞬間

「めぐみ！」

山下が割り込んできた。

ガツ！！

暴漢は、山下を殴った。

「山下さん、大丈夫？」

「いいから逃げろ。」

そう言って、めぐみを後ろへ押し出す山下。

「おっと、」

しかし、数人が回り込んでめぐみの顔を殴った。

「きゃ……」

うづくまるめぐみ……

「めぐみ」

山下はめぐみをかばうように抱き込んだ

「このやろっ!」

山下を数回殴った。

「山下さん……」

かばう山下に声をかける

「はやく……連絡を……」

めぐみは慌てて、携帯をかけようとしていた。

「おまわりさん。こっちです。ケンカしているのは!」

通りの方から声がしてきた。

その声を聞いた暴漢達、

「やばい!」

慌てて逃げようとした。

山下が暴漢の足にしがみついた。

「離せ!このやろっ!」と叫び、山下を蹴ろうとした。

めぐみも慌てて、その男の足をつかんだ。

倒れこむ3人、暴漢たちは、二人をしばらく蹴った。

そこへ警官がやってきた。

暴漢たちは、一人を残し、逃げて行った。

警官に連れられ警察署に着いた三人、明るいところでめぐみを見て、山下は驚いた。

めぐみと思って助けた相手が、会社で会う飯塚めぐみであった。

「大丈夫ですか？」

めぐみは山下に言う

「痛てて……め……飯塚さんも大丈夫か？」

山下は、めぐみの顔を見て、

「顔の傷……」

「大丈夫です……」

「ゴホン！！！」

警官が咳払いをした。

「今取調べ中です。一人が捕まっていますから後は時間の問題でしょう。」

そして、めぐみと山下は、警察を後にした。

「ありがとうございます。・・・まだ痛みますか」

めぐみは心配そうに聞いた。

「ちよつとな・・・」

「今日は、本当にありがとうございます。」

後日、この事件が元で米山部長は、ある地域へ転勤となった。

翌日、会社に出た二人は、みんなに心配されてはじまった。

奥山が「めぐみ、大丈夫？ところで、何で山下さんと・・・」

「昨日は、米山部長の件で帰るのが一緒だったの。」

「ふうん」と奥山は少し半信半疑だった。

「それに、会社を出たの私先だし、後ろに山下さんがいるのを知らなかつたんだから。」

「それだけ・・・」

「だって、私が襲われそうになったのをみて、山下さんが助けてくれたんだから。」

「そうよね・・・でもよかつたは、ケガが軽そうで。」

すると山下が「飯塚さん。」と声をかけ近づいてきた。

奥山は「じゃあ。」とそそくさと立ち去った。

「あ、飯塚さん、大丈夫、昨日は・・・」

めぐみは、立ち上がって「たいしたこと無いです。本当に昨日はありがとうございました。」

山下は、昨日から考えていた確か俺は、めぐみを助けようとしていたな？

後ろ姿とはいえ、飯塚とまちがえたんだ？

そもそも、飯塚を助けたのは、部下といえるが、めぐみをなんで助けようとしたんだ？

そう考えると、時々、飯塚をちらちら見てしまう。

その視線に気付いて、めぐみも思わず見返す。

昼休みになって、「めぐみ」と奥山が話しかけてきた。

「災難ねえ」

「いや」

めぐみは少し頭をかいて、話をそらそうとした。

「無理よ」

こそつと、奥山が話し始めた。

「あの、あなたと同じ同姓同名の彼がいるから」

「えっ」

「この間見たもの、二人仲良く歩くの……しかも……キスしてたのよ」

奥山の言葉にしばらく固まるめぐみ・・・

奥山に見られたことより、キスをしたことを思い出してしまった。

「めぐみ！...どうしたのよ。黙り込んで？」

固まっているめぐみの様子を伺う奥山、めぐみをゆすって見て。

本当？どうしたのよ。そんなにショックだったのかしら？

「めぐみ！...！」

奥山の声ではつとわれに返るめぐみ

「...どうしたのよ。」

「あ...いや...」

「そんなにショックだった？」

「あ...でも、何か、お返しでもしないと...」

「むりむり、何か買っていったほうがいいわよ。」

めぐみは、だめもとで誘ってみるかと思った。

「もし、よかったら、今晚、食事でも...」

「気持ちだけを受けとくよ、ありがとう...」

めぐみは、さうと山下にかわされた。

しばらくして、後ろからめぐみの耳にボソッと

「やっぱ、だめでしょう?・・・」

「まあいいよ、お礼だけでもできたんだから・・・」

そう自分に言い聞かせ帰り支度をした。

いつもの男っぽい服装に戻っためぐみ

めぐみ自身、しばらくは、この格好じゃないと・・・怖い・・・と思
っていた。

その時、携帯がなった。

携帯をとると山下からだった。

「めぐみ、今、あいてるか?・・・」

「いいですよ。いま、近くですから・・・」

「じゃあ・・・いつもの居酒屋で」

居酒屋についた二人、個室で

「かんぱーい」と飲み始めた。

山下は、昨日からのことを話し始めた。

「じゃあ、その娘のことをおいて来たの？」

「奥山のこともあるし・・・」

「奥山さんって・・・あの公園に来ていた。」

「そう・・・あいつも断っているし・・・ただ・・・」

「ただ？」

「今日は、なんとなく飲みたくなってな・・・そしたら、お前の顔がつかんだんだ。」

「じゃあ、なんで私なんですか？」

めぐみは少しうれしそうに話ながら、おもむろに立ち上がり席を山下の横に移した。

「もう、近づくな・・・」

ふと山下がめぐみの顔を見たとき、顔にかすかに青くなったあざを見つけた。

「お前、その顔どうしたんだ？・・・」

「山下さんに助けられた時の傷だよ・・・」

「それは、俺の話だ・・・」

「だから、わたしがその飯塚めぐみだ。」

めぐみは、思い切って言うてみた。

その言葉を聞いて、チラツとめぐみを見てため息をつく山下。

「もう、たつく、お前はこの間、女だといってみたり、今度は、俺の部下か・・・わかった。わかった。」

「でも、もし、私が女だったら、どうする?」

もう一度めぐみは言うてみた。

その言葉に、山下の動きが止まり、しばらく、めぐみの方を見た。

「な・・・なによ」

次の瞬間、

バチーン!!

めぐみの頭からいい音が響いた。

山下が平手でめぐみの頭を叩いたからだった。

「いたーい!!!何すんですか?」

「どう見ても、めぐみは、男だろう。」

そう言い切って山下は、まったく信じようとしなない……

その言葉を聞いたためぐみは、「ふう……」とため息をついて天を仰いだ。

その光景を見た山下はめぐみのあたまをくしゃくしゃと触った。

その手を払いのけようとするめぐみ

しかし、視線はじーっと山下の方を見つめていた。

その視線に気付いたやました

「なんだよ。」

その言葉を聞いたためぐみ、にんまりと笑顔をつくり、山下の体を触り始めた。

「ところで名譽の負傷はどこですか……」

「痛い……やめろ……」

目覚めは最悪だった。

昨日、また山下のところに遊びに行つたためぐみ、

案の定、二日酔いの状態で目が覚めた。

しかし、めぐみは、いつものようにジョギングへでかけた。

「おはよう。めぐみくん」

そこへ、挨拶をしてきたのは優香だった。

「あ、おはようございます。今日は一人ですか？」

「そうよ・・・」

優香は、めぐみの顔色を見て、しばらくして、酒臭いにおいに顔をしかめた。

「どうしたの？うわ酒臭い・・・」

「昨日、山下さんと飲んで・・・」

「まあ。ここに座って。」

近くのベンチにめぐみを座らせた。

「と」ろで、めぐみくんは、女の子でしょっ？」

めぐみは、どきっとした。

「はい……」

「やっぱり……？」

「ごめんね、この間は……」

「いえ、どちらかといえば、もともと男っばいし……」

「でも……女の子らしくしたも」

「ええ……まあ……このほうが楽し〜」

「そうなの……じゃあ、めぐみって呼んでいいよね」

「はい……」

「私のことも、優香ってよんで。」

「優香さんでいいですか？」

「いいわよ。」

優香さつと立ち上がり、振り向きざまに手を出してきた。

めぐみも握手のつもりで手を差し伸べたときだった。

優香がめぐみのほうへ、倒れこんだできた。

「優香さん!?!」

叫んだが、返答が無い。

病院で優香は、応急処置を受けていた。その間にめぐみは山下に連絡をしていた。

「早く出てよ……」

そう思いつつ、コールするがなかなかでない。

それはまだ山下は夢の中にいたからだった。

夢の中で……

彼女がベットをそっと出て行った。

夢つつつに彼女の後姿を見送る山下

しばらくして、

キッチンからいいにおいが……

やがて、

彼女が、ベットに戻ってくる気配を感じた・・・

彼女は、2、3回顔に息を吹きかけ・・・

薄目を開けようとしたところ、

「おはよう・・・」

とささやき

やわらかい、唇をあててきた。

目をあけると、めぐみだった・・・

「うわー!」

びっくりして、起き上がる。

最悪だ・・・と思ったら、携帯がなっている。

「だれだよ・・・」

携帯を見るとめぐみからだった。

「もしもし・・・」

「もしもし、山下さん?・・・めぐみです」

「なんだよ、朝から・・・」

山下は、半分の頃気味だったが、めぐみの必死な口調が目を見まされた。

「山下さん……、島内さんと連絡とって……」

「なんだよ、いきなり光兄いなんて……」

「優香さんが、優香さんが、たおれたの……」

めぐみが、叫ぶ

「えっ……めぐみ。どこの病院だ。すぐ行く。」

「湊中央病院……」

「すみません……」

めぐみの後ろから声がした。

「また電話します。とにかく、島内さんへ連絡して……」

そっぴい残しめぐみの電話はきれた。

めぐみが振り返ると、看護婦が立っていた

「大橋さんのご家族の方ですか。」

「いいえ、友人ですけど・・・」

「ご家族の方に連絡してもらえませんか？」

「もう、連絡しました。ところで、優香さん・・・大橋さんは大丈夫ですか」

「先程、意識が戻りました。今は、面会できます。」

めぐみは、病室へ戻った。

「ごめんね、びっくりしたでしょう。」

優香は、めぐみの方をみた。

「優香さん？ひょっとして・・・」

めぐみは話をやめ、しばらくうつむいていた。

そんなめぐみを見てた優香・・・、

「どうしの・・・めぐみちゃん。先生からなにか聞いたの・・・」

「症状が似ていたの、死んだおかあさんと・・・」

「そう、・・・じゃあ、あなたには本当のことをいうは、わたし・・・」

めぐみは、目から涙がこぼれてきた。おかあさんと同じだ。

「でも、言わないでね、光一さんや、山下君に・・・」

優香の言葉が終わるまで担当医が入ってきて優香に言った

「大橋さんは、だいぶ体調が、悪くなってる。いままで、何をしてきたんだ。」

優香は、担当医に治療及び処方されている薬をはなした。

「大橋さんの場合、このままじゃ、いけないから。・・・明日にでも化学療法を・・・」

担当医が話しかけている時に、優香は、叫びその言葉をさえぎった。

「いやです。あと1ヶ月いえ、2週間は、このままでいさせてください。」

その光景にめぐみは驚いた。優香さん、自分の命がなくなるって時に、なぜ？

声も出せず、ただ見守っているめぐみ。どうしたらいいのかわからない。

そこへ医者は、少し起こり気味に

「それと、君の場合は、移植が必要な状態だ。そんな悠長なことを言っている場合じゃない。」

しかし、頑として聞き入れない優香、そして、

「このことは、光一さんに言わないでほしい」

そう行つて必死になつて、医者をお願いしていた。

担当医は、ため息混じりに「知りませんよ」と言つて去つた。

病室に残された二人、やがて、めぐみは重い口をあけた。

「優香さん・・・島内さん遅いですね。わたし、島内さんの連絡先しらないから、山下さんのお願いしたんだけど・・・」

「今日は、無理よ。ゴルフだもの・・・来るのは、夕方ね。・・・それにしても、おそいわね。山下君」

「ちよつと、見てくるね!」

めぐみは、病室をでて、驚いた・・・

そこには、山下が立っていたのだ。

山下は、無言で、ついてくるように指示した。

自販機のそばまで行き、缶コーヒーを2本買い、二人は、近くのソ

ファーに座った。

缶コーヒーをあけた時、めぐみが口を開いた。

「どこまで聞いたの?・・・」

「全部・・・」

山下の目から涙が落ちた。一粒・・・二粒・・・

めぐみは、山下の前に立ち、頭をそつと抱え込んだ・・・

沈黙の中、山下は、めぐみの両手に包まれ

ただ、ジーツとしていた。

ただ、ジーツと・・・

しばらくして、顔をあげる山下、視線の先にはめぐみの顔があった。

はっと気づくやました・・・

思わず顔を背けた・・・

それに気づき、めぐみも顔を背けた。

「光兄のやつ、どうしてるんだ・・・」

「今日は、ゴルフだって・・・夕方までこれないって・・・」

その言葉にめぐみの方を振りかえる山下・・・
再びめぐみと目が合った。

「あ・・・その・・・」

「それと、病気のことは知らなかったことにてよ・・・」

病室に戻った二人

「山下さん、来たよ」

めぐみ明るい声が病室に響いた。

「優香大丈夫？」

「うん、ちょっとした、貧血、今週中に退院できるって。」

「そうか、よかった。しかし、光兄いのやつ、連絡とれねえんだよ。」

「そりゃそうよ、今日ゴルフだもの・・・」

「そうか、・・・」

「今回は、めぐみがいてくれたから助かったわ」優香はめぐみに目

をやった。

めぐみは、いえいえと両手をふった。

「そうか、・・・ちょうど、お昼だから、飯でも行くか！」

「はい。」

「いいなあ。わたしも行きたい！」

優香が言う

「今回は、おとなしくいろ、」

「うん、わかった。じゃ、気をつけて」

二人は、病室をあとにした。

近くのレストランで、ランチをとりながら、

「これからどうするの？」と山下に聞いた。

「もう一回優香に顔をだしてから帰る。」

「ゴルフってことは、島内さんは夕方かな・・・」

「夕方より、夜だな・・・」

「せめて、花くらい買っていかないか・・・」

食事を終え、ふたりは、病室へ向かった。

「今晚も、付合ってくれないか？」

その途中と山下は、めぐみを誘った。

「いいよ。・・・」

病室に戻った二人、しばらく、3人で話をしていたが、

いつこうに、島内は来ない。

やがて、山下が用事があるからと、めぐみを残して帰っていった。

山下が帰り、再び二人になったためぐみと優香、

めぐみは、ベットの横の椅子に座り、話しかけた。

「優香さん？ひょっとして、最初から病気だったの？」

「そう。」

「どうして？」

「あの人と最後の思い出をすごしたかったの……このまま、2週間後にわたしは光一さんの前をきえれば、彼には、失恋しか残らない。……もし、病気がことがわかれば、彼には迷惑が……」

「違うよ……」

「知ってるでしょ。治療が始まったらどうなるか」

めぐみは、母親のことを思い出し、言葉を失った。

「わたし怖いよ、そうなったとき、捨てられるのが……前、私のわがままで、彼の前を去って行ったから……」

「でも、ずっと待っていてくれたんだから。」

「そんな気休めは……」と優香が恵みの方を見て言おうとした時だった。

めぐみの顔を見て、はっとした。

めぐみが、両目から涙をながしながら・・・じっと優香を見つめていたからだった。

そのめぐみの顔を見た優香は、ただ、ただ、

「ごめん」という言葉を出すのが精一杯にだった。

そして、めぐみに抱きつきもう一度「ごめん」とつぶやき私が間違っていた・・・心の中で叫んだ。

すると「わたしこそ、ごめん。えらそうなことを言っ、」「そうめぐみが謝ってきた。

「いいわよ。」と何か吹っ切れたように言う優香

「けど、光一さんには、言わないでね。」

「わかったわ。」

「めぐみって、かわってるわね・・・」

「なぜ？」

「あつて間もない私にも、本気で。」

「わたしって、単純だから・・・ははは・・・」

「鳴いたカラスがもう笑った。」

「それって……」

「いい意味よ。……光一さんがあなたに会った時はいつもと違って、笑顔が多いの……時々、嫉妬したけど、今なら、なんとなくわかるわ……」

二人は、いろいろと話しこんだ。そして、話題がめぐみの母親のことになった。

「ところで、あなたのお母さんはどんな人だったの？」

「ごく普通のお母さんだったよ、ご飯を作り、掃除をし、洗濯をし、みんなで仲良く……」

楽しかったし……」

「いいなあ、わたしのお母さんは、4歳の時。急にいなくなって、寂しかったのを覚えているの」

そして、優香は過去を話し出した。

「今のお母さんは、父の後妻で、かすかの覚えているお母さんはこのペンダントには、唯一お母さんの顔が残っていたの……」

「どんな人、私に見せて……」

めぐみはペンダントを覗き込もうとした。

「だめよ・・・じゃあ、さっきの続きをおえてよ」

優香はペンダントを手で隠してしまった。

「教えたら、見せてくれる？」

「いいわよ。」

「実は、わたしは、お母さんの連れ子なんだ・・・」

「えっ・・・」

「弟は、今のお父さんとお母さんの間の子供なんだけど、どうも私は、違うみたい・・・それを、区別無く育ててくれたんだけどね、お父さんは、いまもそうなんだけど、お母さんが恋しいのか、時々、お母さんを探しに行きますって・・・いなくなるの・・・」

「そんな時、お父さん大丈夫なの？」

「いつもお墓か、あとは、昔お母さんとデートした場所をうろついている様だけど・・・」

「かわいいわね、あなたお父さん。」とようやく優香に笑顔が戻った。

「お母さんが死ぬ前にね、言い残したことがあってね。4つくらい年上のお姉さんがいるらしいんだ。ちょうど、優香さんくらいだと思うんだけど。」

「そうなんだ・・・ちなみに、弟君はどうなの？」

「実は、勇気は、私より女っぽいの？」

「えっ？ひょっとして・・・」

「違いますよ。けど、家族では、一番お母さんに似ているの」

「本当？一回みたい」

「じゃあ、機会があったら連れて来るね、ところで・・・」

「ああ、ペンダントね？はい。」

優香は素直に差し出した。

ペンダントを見て、めぐみは、驚いた。

「お母さん？」

めぐみの素っ頓狂な声に驚いた優香は、顔を見上げた。

「いま、お母さんて言わなかった。」

「ちょっと待って、写真も古いし」

めぐみは混乱した。なぜ？

「優香さん、あした、もう一度確認してもいい？」

「いいけど、お母さんっていつし、どいつのこと？」

「ペンダントの人が、若い頃のお母さんに似ているの……」

「本当？」

「だから、もう一度……」

「いいわよ」

そうこうしているうちに、がばつと病室の扉が開いた。

そして、「優香！」という大声と共に、島内が入ってきた。

優香とめぐみは、そろって、人差し指をたて、口元につけ

”シー”と静かにするようにポーズをとった。

「じゅん。」

謝る島内をめぐみは見て。

「じゃあ、優香さん、真打が登場したので帰ります。・・・」

「これから、山下君のところですよ。あまり飲み過ぎないでね。」

「は〜い。優香さん、島内さん ばいばい〜」

手を振って病室をあとにした。めぐみ、携帯を見て苦笑した

「何回掛けてきたるんだ？」

その頃、山下は携帯を片手に、めぐみを病院に置いてきたことを後悔していた。

そして、めぐみは、山下の家に着いた。

「入れ・・・」

めぐみを招き入れる山下、いつもように座った。

そして、山下は、辛い顔でめぐみを見て

「優香は？」

「落ち着いていましたよ。大丈夫ですか？山下さんこそ」

逆に心配そうに話し掛けるめぐみ、その話を聞いてうつむき

「そうか・・・」

「辛そうだけど。本当に大丈夫ですか？」

めぐみの言葉にうつむいていた顔を上げ

「大丈夫だ。」

うつろな目で山下は答えた。

「大丈夫そうに見えませんが。」

「大丈夫だって、それより何か飲むか？」

「オレンジジュースで・・・」

「どうして」

山下は驚いた。

「明日、ドナー検査受けようかな？」

「ドナーって、確率低いだろう」

「受けないよりましかも」

「そうか」

「それより」

難しそうに話しかけるめぐみ

「それよりって？何が？」

めぐみの表情を見て、首をかしげる山下

「島内さんに言うかどうかを」

「そうだよ・・・言わないわけにいかないし・・・というより、俺は知らないことになっているし・・・めぐみが言ってくれないか」

「言えないよ・・・本人が、言わないで・・・って言うてるのに・・・」

両手あげて、めぐみは答えた。

「でも、光兄いに悪いし。」

「少し様子を見よう。島内さんが看病しているうちに、優香さんも気が変わるかも・・・」

めぐみが時計をみたら9時半・・・

「あつ、時間だ。帰るから・・・」

「じゃあ・・・」

家に帰ったためぐみは、横になってテレビを見ている父親を見つけて

「お父さん・・・ちょっといい？」

「何だ・・・」

めぐみの方を振り返る父親

「おかあさんのこと何だけと・・・」

そう言っつてめぐみは、父親のそばに座った

「何が知りたいんだ？」

少しいぶかしげな顔をする父親。

「私のお姉さんのこと・・・」

めぐみは父親をまじまじと見た。

父親は、ため息をついておもむろに口をひらいた

「お前の父親は、大橋という男だ。」

父親はめぐみの過去を語りだした。

「私と大橋は大学時代の親友だった。そして、二人は、同じ女性に

恋をした。

そして、彼女を射止めたのは大橋だった。彼女がお前の母親だ。

しかし、大橋の両親は、二人の結婚には大反対だった。それは、すでに

大橋の両親が結婚相手を決めていたからだ。二人の仲を知っていた私は

お母さんの為に二人の駆け落ちを手引きした。」

「でも・・・お父さんは、それでよかったの？」

「私は、今でもそのことは後悔していない。」

「なぜ？お父さんも好きだったんでしょ？」

「好きだったから、お母さんの望むことをしてあげたかったんだ。けど。」

「けど？」

「けど、4年後、大橋は、子供と共に両親に無理やり連れ戻らされた。」

そして、私が行った時には、家に一人お母さんが残され悲しんでいた。」

「じゃあ、おとうさんは」

「悲しみにくれるお母さんを見て、ただ、自分ができることを考えた。」

その時、お前を身ごもっているのを知って、なおさら、結婚することを決意した。」

めぐみは、父親にだきついた。

「お父さん、ありがとう。」

「ところで、お姉さんでも見つかったのか？」

「お母さんの若い頃の写真を持ってたみたい・・・これ」

めぐみは携帯にとった画像を見せた。

「若い頃のお母さんだ・・・ちょっとま待て」

父親は、それを見て席を立った。

そして、古いアルバムを手にして戻ってきた。

「この写真は、多分これだ。」

そこには3人が仲良く写っている写真があった。

「じゃあ、ひよっとして、あの人がお姉さん？」

「で名前は、優香だったかな？」

「そう！優香さんって言うのその人も」

「かもしれないが、よく調べてみないと・・・」

「わかった。それと、これにサインして・・・」

「なんだ、ドナーか。いいよ・明日検査なら、早く寝なさい」

病院についたためぐみ、優香の病室を見ると、優香の横でベットに顔を伏せて寝ている島内の姿が目に入った。

その様子を見たためぐみは、優香に「いまから検査にいつてくる」と口パクで言った。

昼過ぎに、検査を終えたためぐみが病室に戻ってきた。

しかし、病室には、島内しかなかった。

「優香さんは？」

「あ、・・・検査だった。」

「なあ〜んだ。そしたら、もう少し後からきます。」

そう言っためぐみが後ろを向いた瞬間、島内はめぐみの手を引っ張った。

「待て」ときつくめぐみに言った。

「なんですか？」これに驚いたためぐみは、島内の方を見た。

「なにが、俺に、隠していないか？」島内は何かに気づいたようだった。

「なにかって？」

めぐみは、やばい・・・ばれたかな・・・何とか言いつくろわないと思
っていた。

「なにか、いつもと違うんだ。」

島内は少しうつむいた。

島内は、以前、優香が自分の前から消えたこととオーバーラップし
てた。

その言葉を聞いたためぐみは、ふと島内が自分の手を握り続けている
のに気が付いた。

「そりゃ、病院だからでしょう。それより・・・」

めぐみは自分の手のほうをじっと見た。

めぐみの言葉を不思議そうに聞いた島内

「それより・・・って?」

そつと握り締められた手をあげるめぐみ、そして、

「手・・・手を離していただけませんか?」

「あつ、ごめん・・・」と島内はその光景に驚き、手を離した。

「見られたら優香さんが嫉妬しますよ。しっかりしてください。」

「じめん」

頭をかく島内

「昨日、ほとんど寝ていないでしょう。今日は、帰ったほうがいいですよ。」

そう言っている時に優香が帰ってきて島内に話しかけた。

「めぐみと何してたの?」

頭を掻いて、答えに戸惑う島内

「いや、なにも・・・」

「いいわよ、ところで、光一さん席をはずしてもらえる?」

「えっ どうして?」

「いいから、いまから、めぐみを誘惑するの?」

島内は焦った表情をして

「めぐみ・・・ばっばかをいうな、彼女は女だぞ。・・・」

「ふうん、かわいいからいいじゃない・・・何をそんなに焦っているの?」

「いや、焦ってなんかいない。」

「ジョーダンよ。女の子にしか頼めないことがあるの・・・だから」

「わかった」

しづしづ島内は部屋を出て行った。

「大丈夫？」

めぐみが聞く

「とりあえず、落ち着いたみたい。めぐみこそ、大丈夫？」

「たいしたことなかったから。夕方に勇気に迎えに来てもらうから……」

「じゃあ、ついでに弟も見たいけどいい？ところで山下君は？」

「あれ？今日は来てないの？」

「そうよ。」

「おかしいなあ〜」

「昨日会ったんでしょう？」

「まあ……」

「ふうん」

まじまじとめぐみを見る優香、そして、

「めぐみみたいなのが好みだったのか。」

優香がそう言つたとその言葉に驚いたためぐみは、

「な!!何を言うの?」

慌てて言い放ち、顔を真っ赤にした。

「だって、山下君って、友達でもあまり自分の家まで呼ばないのよ。」

「でも・・・」

うつむくめぐみ、その様子を見て不思議そうに

「でも?」

優香が聞き返す

「でも・・・山下さん、わたしのこと男とみているみたいだし。」

めぐみがつぶやくと、その言葉に耳を疑った優香は

「え?今なんて?」

「山下さん、私のこと、男としかみてないの!」

「そんな・・・」

あきれると言うかなんと言ったらいいか判らない優香だったが

「じゃあ、いつ告白するの？女って事を」

「ややこしいの・・・、会社では、女の格好をして、仕事をしてい
るんだけど。山下さんは、気づかないの・・・私ってことに・・・
それに、何回も女だっていってるのにまったく信じてくれないの・・・」

「なに、それ」と優香は笑みを浮かべた。

「ところで、お母さんの件は。」

「はっきりしないけど、これが、お母さんの写真・・・」
そう言っつて写真をみせた。

「本当に？」

「ただ、写真と話がにているだけなんだ・・・はっきりした証拠がないんだよね」

しかし、優香は、にこやかに

「いいじゃない？姉妹ってことにすれば、二人だけの内緒で・・・」

「それもそうね、昨日の今日だし。ところで、頼みって？」

「下着を持ってきてほしいの」

「両親は？」

「呼びたくないの？」

めぐみの携帯がなる

「あ、勇気からだ、ちょっと待って」

「勇気、病室に上がってきて。」

優香は、場所を教えているうちに

「失礼します。」と勇気が入ってきた。

「茶髪だから見た目は、すぐにわかんないでしょ。勇気これつけて」

「ったく・・・なんで、ここまできて」

しかたなく勇気は黒髪のかつらをつけた。

そこには、写真で見た若い頃の母親そっくりの姿になった。

「ほんと！写真のおかあさんみたい・・・」

「たま〜に、写真のメイクをしてもらうんだ。」

「なにがしてもらうんだ・・・無理やりだろ、無理やり」

「勇気くんは、めぐみに抵抗しないの？」

「勝てないよ、むちゃくちゃ強いから・・・あ・に・き」

「こら、あにきとはなんだ、あにきとは、姉に向かって。」

そこに「そろそろいいか？」と島内が入ってきた。

3人の姿を見て島内は、女が3人いるとおもった。

「光一さん。いいよ。」

「さつき、もう一人女の人が入ってきたけど。」

めぐみが勇気を指差し紹介した。

「こいつ。私の弟のゆうきです・・・。」

島内が驚きのあまり思わず本音を言ったしまった。

「めぐみちゃんより、おんなっぽいなあ。」

島内の言葉にきよとんととして、

「島内さん、ひどーい。」

言い返すめぐみを見て笑いながら優香が突っ込みを入れた。

「でしょ?。」

その言葉にとつとつめぐみはむくれてしまった。

「優香さんまで。」

しばらく、4人のにぎやかな会話が続いた。

「さてと、いったん帰ります。」

「もう帰るのか？」

「じゃあ、たのむわね。」

「はい。いくぞ勇氣。」

二人は病室を後にした。

病院に荷物を届け、家に帰ろうとした時、

めぐみの携帯がなった。携帯を覗き込むと山下からだった。

「もしもし」

「俺だけど．．．」

「どうしたの．．．」

「頼む来てくれ．．．」

「わかった。」

山下の家に着いたためぐみ、玄関で呼び鈴を鳴らすが反応がない

ドアノブに手をかけると、鍵が開いていた。

気になっためぐみが中を覗くと、部屋は真つ暗な状態だった。

そして、「山下さん、入りますよ」と言って玄関から入って行った。

廊下を進み暗い部屋にたどり着く、そこで「山下さん？」と声をかける。「ああ．．．」と奥から声がした。

明るくすると、そこには、虚ろな表情をした山下が横たわっていた。

「大丈夫ですか・・・」

めぐみの声に目を向ける山下だがすぐに視線を落とした。

「大丈夫だ・・・」

「そうは見えないですよ。」

心配そうに山下の方を見つめるめぐみ

「大丈夫だ。」

山下は繰り返し言った。

「ところで、今日は、どうして来なかったのですか？」

そう言ってめぐみは、山下と向かい合って座った。

「いや・・・べつに・・・」

山下の気のない返事。

「どうしたんですか。」

「どうしたらいいんだろう?」

山下がつぶやいた。

「なに、言ってるんですが、・・・好きな人なんですよ?それより、

大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ……」

山下は、同じ言葉を力なくはいた。

「そうは見えないけど……」

めぐみは立ち上がって山下に近づいた。

そして、山下の顔を見つめた。

山下は、ただじっと……涙をこらえていた。

その顔をじっと見つめるめぐみ、そして、山下の横に座って

「大丈夫……」

めぐみは山下の頬に両手をあて、じっと山下の顔を見つめた。

そしてもう一度「大丈夫」とささやき、そっとキスをした。

山下も最初は驚いたがやがて……目を閉じた……お互いの唇がはなれ。

見詰め合う二人、しばらくして、山下はめぐみとキスをしたことに驚いた。

「何驚いてんですか？」

「何って・・・」

「ところで、面会に行かないんですか？」

「どんな顔をして、会えばいいんだ・・・」

山下の顔が再び暗くなった。

「それで、今日は来なかったんですか」

「ああ・・・」

気のない返事が返ってきた

その言葉を聞いて、めぐみは

「私の死んだお母さんが入院した時、毎日、会いに言ったよ・・・
いつも通りに」

山下の方を見つめた。そして、こうつぶやいた。

「お母さんが死んだ日まで・・・」

その言葉を聞いて、ただ、めぐみを見つめる山下

「めぐみ・・・お前は、強いよな」

めぐみの頭をなでた・・・

「強くないよ。」

「えっ、」

「私、そんなに強くないよ。．．．」

その言葉に驚く山下．．．めぐみの顔を見ると目に涙を浮かべていた。

「ごめん．．．」

「お母さんは、死んじゃったけど．．．後悔してない．．．」

めぐみは、ボロボロと涙をこぼしだした。

山下は抱きしめ

「めぐみ．．．ごめんな」

しばらくして泣き止んだめぐみ．．．ソファに二人並んで座っていた。

「めぐみ．．．」

「なに．．．」

「明日でも行ってみるよ。．．．」

山下はめぐみの肩によりかかった。

「山下さん？」

横向く

「めぐみ……ありがとう……」

すたとんと頭が肩から前に落ちてきた。

両手で頭をささえて

「山下さん？」

山下は、眠っていた……めぐみは、膝枕でしばらく寝かせた。

朝、山下が目をさましたら、メモがあった。

”ガンバだよ……”

「何がガンバだ……女みたい……」

数日後、めぐみは医者からドナー鑑定の結果を聞きに病院に来ていた。

「移植可能です。身内でもない限りこんなことはないですよ。」
と医者も驚いていた。

実際に、移植を行うまでには、2ヶ月の準備期間がかかることなどの説明を受けた。

「先生、ちなみにDNA鑑定で姉妹とわかるんですか？」

「ええ、できますよ・・・どうかしました」

「いえ、こちらの話です。」

めぐみは、優香が助かることを知り喜んだ。しかし、優香は今更言えない。と手術を拒んだ

「何言ってるの、手術をすれば、助かるし・・・」

「あなたは、何も知らないからそんなこと言えるの。」

「えっ？」

優香の言葉に驚くめぐみ。

「移植後の生存率知ってるの？」

「生存率って？」

「移植を受けて、5年先まで生きた人って、50%しかないのよ。」

そう言つて、優香はうつむいた。その事実を知つためぐみ、次の言葉が出ない。

「けど、」

「そんな状態で、光一さんにこれ以上、迷惑はかけられないわ。」

「けど」

「けど？」

つばやくめぐみの方を見る優香、そしてため息をついて

「手術をやめる」

「だめ！！　だめよ！！」

大声で叫ぶめぐみ

「何が駄目なのよ。めぐみ」

「まだ、可能性あるんだから！」

「可能性？50%しかないのよ」

あきれた表情をみせて優香が言つと。

「まだ、50%もあるのよ。」

「わからない子ね!!」

「お母さんの時は、ただ、死を待っただけだったのよ。」

涙ながらに言つたためぐみの言葉に今度は優香が息を呑んだ。そして、自分の行動を恥じた。

しばらく、黙り続ける二人、やがて、めぐみが重い口を開いた。

「何を恐れているの？ 島内さん倒れた日も徹夜してくれたんですよ？ 接待ゴルフの後でも、……で毎日来てくれるんでしょう？ 島内さんを信じてあげてよ。」

「めぐみ……でも」

「私の願いも聞いてよ。……」

涙ながらに願うめぐみの姿を見て優香は決心した。

「わかったわ、受けてみるわ。けど、お願いがあるんだけど、」

「いいわよ」

「告白する時、そばについて」

「
わかつた。
」

夜になって、島内が優香の病室にやって来た。

「今日は、めぐみちゃんも一緒か」

そう言って、優香のベッドのそばに座った。

優香は緊張していた。

それに気付いた島内はやさしく声をかけた。

「どうしたんだい？」

「光一さん、話があるの・・・」

優香が話した。そして、病名を伝えた。

病名を聞いた島内、島内を見つめる優香、その様子を見るめぐみ、

病室にはしばらく沈黙が続いた。

沈黙の中、無言で島内は立ち上がり、部屋を出ようとした。

「島内さん」

めぐみが呼び止めたが、

そのまま何も言わず島内は病室を出て行った。

島内の態度を見て、ボロボロと泣く優香

めぐみは、すぐに島内を追いかけた。

そして、病院の近くで島内を見つけた

「待ってください!!」

島内を呼びとめ近づくとめぐみに対して、

「これ以上近づくな!」

背中を見せたまま叫ぶ島内

彼の背中が泣いていた。

おもむろに、「2年前もそうだった。」と島内は話し始めた。

「おれは、優香にプロポーズをする日だった。彼女から別れを言い出した。・・・そして、今度も・・・」

そう言ってうつむき、悲しそうにつぶやいた。

「ちがうよ、島内さん、優香さんは、別れたくないから。島内さんを信じたから」

必死に優香の事情を説明するめぐみ、島内は、その言葉を

「しかし・・・」と遮り、やがて、背中を見せ去ろうとした。

「待ってよ。」

めぐみが手を引くと、物凄い形相でめぐみを睨んだ。

そして、

「離してくれ。」といい、その場を去って行った。

病室に戻った、めぐみ、そこには、ベットとに倒れこみ涙する優香の姿があった。

「ごめんなさい。」

めぐみか細い声でポツリと言った。

その声を聞いて、めぐみの方をむいて、優香はめぐみに枕を投げつけた。

「あなたの顔見たくないから出て行って！」

「ごめんなさい。」

めぐみは何度も謝ったが、とうとう、病室から追い出された。

とぼとぼと夜道を一人歩くめぐみ

しかたがない自分が悪いんだ。そう思いながら

そんな時、山下からめぐみの携帯に連絡が入った。

「めぐみ！！、優香に何をした。・・・泣いていたぞ・・・」

これが山下の第一声だった。

「島内さんに本当のことを言ったの・・・」

山下は、言葉を失った。

「今どこだ、」

「湊駅……」

「すぐ行く、待ってる!」

駅前で待つめぐみ、しばらくして、山下が現れた。

「光兄いは、どうしたんだ……」

「出て行ってしまつて……」

そう言つて、うつむくめぐみ

「なぜ言つたんだ。!!」

山下は怒鳴つた。

「なぜつて? だつて、移植できるつてわかつたのに」

めぐみが泣き出した。

その様子を見ても、山下の怒りは治まらなかつた。

「なにも、今じゃなくてよかつたんじゃ」

再び怒鳴る山下

その声に泣きつつも反論するめぐみ

「今、言わないといつ言うの？手術になったらばれるのよ！ーじゃあどつすればいいの？」

その言葉に、とうとう山下は切れてめぐみを残して行ってしまった。

一人残されためぐみは、ただ・・・ただ・・・泣いていた　ひとりで

その頃、島内は、家にいて頭を抱えていた。

そして、2年前のことを思い出していた。

あの時、優香がいなくなった時の虚しさが甦ってきた。

しかも

今度は本当にいなくなると思うと何もかも手につかなくなっていた。

そう思っていると帰ってきた優香との日々が想い出された。

ふと気がつくとき島内は引き出しをあけていた。

そこには箱がひとつ。

あの時、渡せなかった指輪が入った箱が

それを握り締め、じーと考える島内……

やがて、島内は、走り出した。

そう、病院へ

手には、2年前に渡せなかった指輪を持って

病室の前についた島内

彼が扉が開くと・・・

そこには、一人泣く優香・・・

「ゆうか・・・」

そっと声をかける。

その言葉に反応する優香

やがて、

「ごういちさん・・・戻ってきてくれたの・・・」

涙を手でぬぐい

島内の方を振り返えった

「・・・」

無言の島内

「どろしたの？」

やがて、島内は口を開いた。

「一緒になってくれ・・・」

えっ・・・優香は、言葉を失った。

島内は、優香の前に膝をついて、指輪を見せた。

口をおさえて、驚く優香、目からは、大粒の涙が、一粒、二粒ほほを流れる。

「はい・・・」

小さな声と共にならずいた。

島内は、優香を抱きしめた。

そして、

指輪を優香の薬指にさした

家に帰って、途方に暮れるめぐみ

勇気がからかってきても、反応すらしない。

まわりが心配している時、めぐみの携帯がなった。

携帯を何気なく見て、優香からだとなり慌ててとるめぐみ

「もしもし」

「めぐみ……ごめんなさい」

これが優香の第一声だった。

「わたしこそ、ごめんなさい。」

「実は、……」

「えっ!?!」

めぐみは、立ち上がった。

あのと、優香は、島内からプロポーズを受けたというのだ。

「で、返答は……」

「もちろん。OKよ……」

「おめでとう……」

「ありがとう……なんか、元気ないわね……」

「さっきの今だから……混乱してるの」

めぐみは、山下と喧嘩したことを言えずにいた。

「じゃあ。またね……」

「はい……」

優香が電話を終えた頃、病室に山下が入ってきた。

山下は、病室に入って目の前の光景に驚いた。

てっきり、優香が一人で泣いていると心配していた。

それは、泣きながら電話をしてきた優香、

そして、優香を残して、出て行ったはずの島内

その二人が楽しそうに目の前にいるではないか。

その光景にただ呆然とする山下。

彼の表情を見た島内が

「どうした？」

「ちっき・・・」

言葉に詰まる山下

一体どうなってるんだ？

頭の中が混乱していた。

「ああ〜」

恥ずかしそうに声をあげる島内

そして、

「ごめん・・・」

優香があやまってきた。

山下は、二人の話を聞いて、驚いた。

「えっ〜！！プ・・・プロポーズ!？」

じゃあ、俺がケンカをしたのは？

どうしよう??

「おい、なにか？浮かない顔をしているが」

「いや、おめでどう・・・じゃあ、安心したから帰るよ」

そう言い残し山下は、病室を去った。

一人部屋に戻っためぐみ、ベッドに横たわった。

そして、山下と喧嘩したことで悩み、眠れなかった。

その頃、家に着いた山下、めぐみと喧嘩したことに後悔した。

翌日、めぐみは日課のジョギングに出た。

するといつもの場所で、ジョンを連れだした島内が待っていた。

「おはよう・・・」

「おはようございます。あ、おめでとございます。ジョンも元気だったか？」

ジョンの頭をさわり遊ぶめぐみ。

すると

「ちょっと・・・いい？」

島内がめぐみを誘い、二人で近くの椅子に座った。

「いろいろ、ありがとう・・・ドナーまで」

そう言っ島内は頭を下げた。

「いえ、そんな・・・偶然ですよ。ドナーは、」

謙遜するめぐみ

「いや・・・何から何まで・・・何といたら・・・本当に・・・ありがとう」

そう言って島内は、もう一度頭をさげた。

「いいんですよ……島内さん……」

戸惑うめぐみ……

やがて、顔をあげた島内は、彼女の顔を見て驚いた

それは、めぐみの目がはれていたからだった。

「それにしても、今日はひどい顔だな。目がはれあがってるぞ」

「えっ……そんなにひどいですか。」

めぐみは恥ずかしそうに両手で顔を覆った。

「なにか、あったの？」

島内はめぐみの顔を指差した。

「いえ」

うつむくめぐみ

「ひょっとして……?」

「いえ、なんでもないです。」

「顔に書いてあるぞ……喧嘩したって」

「え？」

「やはり・・・ごめん。昨日のことは、」

「いえ、いいですよ。・・・」

「好きなんだろう？」

ふいに島内がなった言葉に戸惑い顔を真っ赤にするめぐみ

「ちがいます・・・」

口では言ったがめぐみの目から涙がこぼれ落ちてきた。

しばらく、めぐみが落ち着くまで、島内は横にいた。

「島内さん、ありがとうございました。」

「その顔だと、今日は、会社を休んだほうがいいな。」

「はい。」

「自分の気持ちに素直になったほうがいいよ。じゃあ」

島内は去っていった。

「こんな早くに面会なんて、どうしたの。まだ7時よ」

突然、病室に入ってきた山下を見て優香が驚いた。

山下が出勤前に面会にきていたのだ。

「いや、昨日、遅かったんで、それと今日、来れそうにないから」

「それだけ？」

「それだけだよ。」

「それと、昨日は、本当にごめんなさい・・・心配掛けて。」

優香はあらためて謝ってきた。

「そうだよ、本当に驚いたよ。・・・それに光兄いには、もっと驚かされたけど。そういえば、光兄いは？」

そう言っって山下は、辺りを見まわした。

「ジョンとお散歩よ。多分、ひよっとしたらめぐみと会ってるかも。」

「えっ・・・」

「そういえば、めぐみにも謝って・・・お願いできる？」

「自分から言えば」

「めぐみ、いつ来るかわからないから」

「俺も同じだよ。いつ会えるかははっきりしないから。」

「何言ってるのよ。めぐみをいつも誘ってるくせに。」

「えっ?」

「知ってるわよ〜めぐみと欲のみに行くんですってね。」

「それは・・・」

「ひょっとして、めぐみのこと好きなの?」

「あのなあ〜」

慌てる山下を見た優香、もう・・・顔に出てるんだからと楽しそうに。

「ひょっとして?凶星?」

「さつきから、めぐみ・・・めぐみ・・・ってところでいつからそんなに仲良くなったんだ・・・あんまり言うと、光兄いに嫉妬されるぞ。。。」「と山下は話題をそらそうとした。

山下の言葉にあきれる優香・・・本当に・・・かわいいんだから

「あら、いけないの。めぐみってよんだら・・・ひょっとして、

妬いてるの？」

山下は、冷静さを失った。

「おれが！？ 妬いているって。」

「かわいいわよねえ。めぐみ……」

優香は山下をあおった。

「な……何を……俺は……ただ、めぐみと会っていたら。光兄いがやきもちを妬くって。」

「わたしも最初は、騙されたもの。めぐみちゃんに……」

「めぐみちゃん？……あいつは、男だろ……」

山下はため息をついた。

「どうしたの？ 好きなんでしょ？」

山下はうつむいて。また、ため息をついた。

「なにか、あったの？」

「いや……」

「ふん」

「そろそろ、会社に行く時間だから……じゃあ、また。」

会社で仕事をしていた山下、ふとめぐみのことを思い出し、ため息をついた。

「山下さん。」

奥山が声をかけた。

「なんだ？」

そう言っておもむろに顔をあげる山下、いつもの歯切れのよさがない。

「今日、めぐみ」

奥山が言いかけると山下はびくつとなった。

「なに、驚いてるんです？」

「いや、なんでもない・・・」

無理に驚いた表情を隠す山下。

「めぐみ、今日休むそうです。」

「そうか・・・」

山下の様子が気になった奥山は心配して

「なにか、あつたんですか？暗い顔をして」

そう話しかけたが、山下は、適当にうそをついた。

「本当になんでもない。・・・友人が入院しただけだ・・・」

「そうですか。」

奥山は、山下の前から去った。

そして

しばらく歩いて

「めぐみも二日酔いでも、出てくるのに・・・めぐみになにかあったのかしら」

思いつつ自分の席に向かった。

めぐみが病院にあらわれたのは、夕方になってからだった。

そして、優香の病室に入り、優香の横に立った。

「優香さん、昨日は、ごめんなさい・・・、そして、おめでとう・・・」

めぐみが頭を下げると優香は軽く左右に首を振って

「何言ってるの、めぐみ・・・私のほうこそ、・・・」

そのしぐさを見ためぐみはようやく笑顔を取り戻し、

ベッドの横の椅子に座った。

「それにしても、島内さんには驚かされましたよ。」

めぐみの笑顔を見た優香も笑顔を見せた。しかし、うつむいて

「うん。わたしもまだ半信半疑なの・・・」

不安な一面をのぞかせた。

「そんなこと言わないでよ」

逆に心配するめぐみに優香は顔をあげて

「でも、今の私を受け入れてくれたんだから」

「そうよ、幸せになってね。」

めぐみは花束を渡した。

「ところで、山下君となにかあったの・・・」

優香がめぐみの顔を覗き込んだ。

その言葉にめぐみの笑顔が、一瞬で消え

「いえ・・・」

言葉を濁した。めぐみの様子を見た優香は、

「ひょっとして・・・」

話を続けようとしたが、めぐみが話をさえぎった。

「大丈夫です。2、3日もすれば、おさまります。」

「本当？」

心配そうにめぐみの様子を見つめる優香、

なかなか次の言葉が出ないめぐみ。

「ええ・・・あっ・・・そろそろ、わたし、先生のところに行かないと・・・」

「・・・」

めぐみは立ち上がった。

「どうしたの？」

「手術の説明があるの、じゃあ。また」

そう言い残してめぐみは病室を去った。

しばらくして、山下と島内があらわれた。

そして、病室に入るや、山下は、

「おめでとう、ご両人・・・昨日は、驚きのあまり、いえなかったんで・・・」

その光景を見ていた優香は、山下と島内に向かって

「さつきまで、めぐみ来てたのに・・・会わなかった？」

その言葉を聞いて山下は、言葉を失った。それを見ていた島内が

「いや・・・、また、戻ってくるのか？」

「多分無理、今日は、もう帰るっていつてたから。」

「そうか」としばらく3人で話をした。

そんな中で、島内は山内の方を向いて、急に真顔になった。

「ところで、お前に頼みがあるんだけど。」

「頼みって何だ・・・光兄い・・・」

「遅くなるから・・・ジヨンの散歩を頼むよ」

「えっ、やだよ・・・誰かほかにいないのか」

「今日、誰にも頼めなかったから、お前に頼んでいるんだ」

「じゃあ、もう帰りますは、お邪魔虫は、・・・それと

光兄い、めぐみに優香を取られんようにな・・・

優香、気があるようだから

「もう・・・」

少し怒ったようなおどけたような顔を見せる優香

「ああ・・・気をつけるよ・・・じゃあ」

「じゃあ」

山下はボタンと扉が閉じ、病室から出て行った。

優香と島内はふきだした。

「光一さん・・・本当に？山下君は、めぐみを男と想ってるみたい。」

「ああ・・・あんなだけ、みんなで、女だと言ってるようなものだけ
ど・・・」

「ところで、ジョンの散歩は、二人をあわせようとしたこと？」

「・・・ウチへ来て、お母さん」

エレベーターでおりる山下・・・

なんでおれが、ジョンの散歩なんかと思っているとドアが開いた。

そして、一步踏み出そうとしたとき、目を疑った。

目の前にめぐみがいたのだ。

「めぐみ！」

気がついたら声をかけいた

声に反応しためぐみ、思わず逃げてしまった。

なんで山下さんがいるの？まだ、心の整理が出来ていないのにと

めぐみは、焦った。

山下は、めぐみを追いかけた・・・

めぐみはただ逃げた・・・

「待て！！めぐみ！！！」

逃げるめぐみを追いかける山下。

徐々その差縮まりやがてめぐみに追いついた。

そして、遂にめぐみの手を後ろから捕まえ

「ごめん・・・めぐみ」

その言葉にめぐみは立ち止まりただ

「うん。」

しばらくして、二人の姿は、近くのベンチにあった。

「本当に、ごめんな」

「わたしこそ、もう少し、確認しとけばこんなことに」

「本当に、すまん」

山下は、めぐみの前に立ち上がり頭を深く下げた。

「そんなことしないでよ。・・・それより、そろそろ、かえりましょ。」

「あゝ!!今何時?」

山下は、大声をあげた。

「どうしたの?」

「ジョンの散歩をたのまれてたんだ」

「わたしも、行く!」

二人は、島内の家に行き、ジョンをつれて散歩向かった。

あんまり、散歩をしたことがないのか・・・うまく連れて行けない

山下

よろめきながらジョンをつれて歩く二人、やがて公園についた。

「ジョンおいで・・・」

ジョンと無邪気に遊ぶめぐみ

山下は、じつとめぐみを見ていた。そして、胸の鼓動が高鳴っていた。

まずい・・・おれ、本気で・・・と戸惑っている

「どうしたんですか、山下さん？」

ボーっとしてる山下に気付いたためぐみが覗き込んできた。

その顔に驚く山下。

「うああー!!」

「何驚いてるんですか？」

山下の行動を見て笑いながら、ジョンと戯れるめぐみ

遊びもひと段落して、ジョンを連れて並んで歩く二人・・・

「あゝあ・・・楽しかった」

山下は、ふと立ちり、

「めぐみ……」

「なに……」

めぐみは、両手を後ろにして立ち止まり、振り返った。

そのしぐさに、山下はどきっとして、めぐみを思わず抱きしめた。

「やま……し……」

めぐみの声が途切れ、山下が声をかぶせた。

「お前が……」

その時だった。

”わん、わん”とジョンがほえだし、ロープがするりとめぐみの手から抜けた。

「あつ……ジョン……待て」

二人は、ジョンを追っかけた。

ジョンを捕まえて、無言で歩く二人……

めぐみは、さっきの感触が残っていた。

そう、山下の感触が……

そして、ただ何も言えずにいた。

一方、思わず抱きしめてしまった山下、どうしよう……という言葉が頭の中を駆け巡っていた。

やがて、二人が島内の家に着くと、「お帰り」と島内が待っていた。

「島内さん」

「光兄い」

「」「どうして？」

「ちょっと荷物を取りに帰ったんだ。」

二人が驚いていると島内はじつと二人の様子を見て、

「ふん。仲直りできたんだな」

「じゃあ……遅くなったんで……島内さん、山下さん、失礼します」

めぐみは、そそくさとその場から離れて行った。

「あっ・・・」

言葉を出せない山下。対照的に島内は

「さようなら・・・気をつけてな」

めぐみはその言葉に振り返り手を振った。

めぐみの姿が見えなくなった頃、

「どつだつたんだ？」

島内は、山下の肩に手を置いた。

「どつ・・・つて？」

少し嫌そうな顔をする山下、その顔を見て島内はにやりと笑い

「好きなんだろう？」

「バツ！！馬鹿なこと！！」

言葉に詰まる山下、そして、悲しそうな顔をして、

「何そんなに浮かない顔をしてるんだ？」

「いいだろう・・・じゃあ。」

山下は慌てて去った。

家に着いたためぐみ、慌てて帰ったまではよかったが、

さっき山下の抱きしめられたことを思い出し

胸が熱くなっていた。

そして、

「お前が・・・」と言う山下の言葉が心に引っかけた。

しばらく、ボーっとしているめぐみ、そんな時、勇気がからかいに入ってきた。

「アニキ、何ボーっとしてるの？」

ぼーと勇気を見て優香は

「何？勇気・・・」

「だから、アニキどうしたんだよ。」

そう言って勇気が肘でめぐみをつつく

「何すんのよ。なんでもないわよ・・・もうっ」

「あっ・・・そう、じゃあ、アニキもう寝るわ。」

「そう、おやすみ・・・」

「おやすみ」

勇気は、やっぱりおかしい、なんで怒らないんだ？と思いつつ、めぐみの部屋をあとにした。

一人になったためぐみ、少し落ち着いてここ数日のことを思い出していた。

優香の入院・・・、そして、告白、優香と島内の婚約、山下との喧嘩

あれ？なにか？忘れてる・・・

そして、あることを思い出し、頭が大爆発した。

そう・・・いえば・・・わたし・・・キスしたんだ・・・山下さんと

しかも・・・わたしから・・・どうしよう・・・

その頃、山下は、めぐみに抱きついたことに焦っていた。

あいつのことが・・・けど、あいつ・・・男だぞ・・・と頭を振るい、

いかんどうかしていると自分に言い聞かせ、無理やりめぐみのことを忘れようとした。

しかし、しばらくすると自然とめぐみのことが思い出される。

そう、いつも何かあったら、そこにめぐみがいた。楽しいとき、悲しい時、

そして、あのつらい時・・・めぐみとのキス・・・

あいつは・・・あいつは・・・と胸が熱くなるし・・・

どうしたらいいんだ・・・

それぞれの悩みは、夜の闇と共に深くなっていった。

朝の日課を終えためぐみ、この日は島内と会えないでいた。

昨日のことが頭から離れないめぐみにとっては、逆に

会わなかった方がよかったとさえ思えた。

そして、いつも通り出勤しためぐみ、相変わらず一番だった。

ある程度、掃除を終えためぐみ、ため息をついたら。

「なに朝から、ため息ついているのよ。」

めぐみが振り返るとそこには奥寺が立っていた。

「奥寺さん……おはようございます。」

「なによ……元気ないわね。昨日休んどいて。」

奥山がめぐみの横に来た。

「昨日何かあったの?」

「えっ……あ……いや……」

「あ〜」

めぐみの様子を見て、にやりとする奥寺

「何もないです。何も・・・」

トーンダウンして、否定をするめぐみ、それを見た奥山は残念そうに

「あら・・・そう？そういえば、めぐみ、昨日来なくてよかったわ。

」

「なぜ？」

「昨日の山下さん、珍しく感情的で・・・もう、怖かったんだから・
・ところで、何であなた休んだの？病院って行ってたけど・・・」

「うん、ちょっとね・・・」

二人は仕事に戻った。

仕事の最中めぐみは、気付かないうちに山下を見ていた。

それに気付いた、奥山は、昼休みにめぐみを呼んだ。

「大丈夫？」

「えっ？」

「めぐみ・・・本当に大丈夫？」

「なにが・・・」

「もうっ・・・しらばっくれて。見てたでしょう・・・山下さんの」

と

「え・・・」

驚きを隠せないめぐみ・・・

「なにが・・・えっ・・・よ・・・」

「そんなに・・・」

「そうよ、気をつけなさいよ。まだ、山下さん気付いていないみたいだから。」

「はい・・・」

そう返事をしためぐみだが、胸が苦しくなっていた。

一方、山下は、めぐみの視線に気付いていた。

しかし、彼にとっては、めぐみではなく

同僚の飯塚からの視線でしかなかった。

仕事が終わった山下は、優香の所に向かった。

病室に着くとそこには優香と島内がいた。

「どつ？」

病室に入って、辺りを見回す山下。

山下の方を見る二人、そして、

「誰か、さがしてるの」

優香が聞くと、その言葉に躊躇した山下だったが

「いや、べつに・・・で、体調はどう？」

「大丈夫よ、今は、落ち着いているから。」

「そうか。」

「それより、光一さんから聞いたんだけど、めぐみと仲直りしたの。」

その言葉にピクリと反応する山下そして「ああ・・・」と暗く答えた。

「どつなの？」

「まあ・・・」

ただ暗くうなづく山下。その様子を見た二人は、顔を合せ。

「めぐみのことなんだけど」

優香が言つと不思議そうに優香の方を見る山下。

「めぐみがどうしたんだ？」

「女よ。」

「えっ！！ウソだろう・・・あいつはどう見ても男だろう」

驚いて言い返す山下に、島内が

「本当だつて。めぐみちゃんは女だつて。」

「またまた！！光兄いまで」

まだ不信そうな顔つきで優香と島内を睨む山下。

「そんな顔をするなよ。だいたい、こんなこと、うそをついてどうする。」

「なんで、知っているんだよ。」

「前に話したろ・・・ほぼ毎朝会うんだよ、散歩の時にそれに、お前の前でなんと女だと、優香も俺もめぐみも、言ってるのに、いっこうに男だとお前が勝手に思ってただけだろ」

山下は、今までのことを思い出した……

そういえば、あいつ一度も男とは言わなかった。そう思うと無性にうれしさがこみ上げてきた。

「どうするの？」

優香の言葉に山下は、立ち上がり礼を言って病室をあとにした。

そして、めぐみに連絡した。

しかし、携帯は、繋がらなかった。

それは、この日、めぐみには、検査があったからだった。

何度もかける山下……

しかし、めぐみには結局繋がらなかった。

検査を終えたためぐみ、病院である人に声をかけられた。

「君が飯塚さん？」

そう話しかけたのは、優しい紳士的な人だった。

「はい。」

不思議そうに返事をするめぐみ

「優香の為にありがとう。」

そう言ってその人は、深々と頭を下げた。

「紹介が遅れました、優香の父です。」

えっ!!と驚くめぐみ、この人が実のお父さん？と

「はあ」

「それでは、」と優香の父は去って行った。

しばらく、立ち尽くすめぐみ……

そこへ、優香が通りかかった。

「めぐみ?どうしたの」

「あっ・・・いや・・・」

言葉が出ないめぐみだったが、優香のお父さんに会ったことを告げた。

「もつつ勝手なことをして」

半分怒り気味の優香、

「偶然だから」

「そんなことないわ。偶然の振りして、しっかり根回しするのよ。」

「まあまあ・・・」

優香をなだめるめぐみ、そんな時、優香が思い出したように

「山下君から連絡あった？」

「いえ・・・」

「おかしいわねえ」

「なぜ？」

「なぜって？気になる？」

「気になるわよ。そんな言い方されたら。」

「めぐみが女だって言つといたから。」

「えっ？」

「だから。女だって。」

その言葉にめぐみは、呆然とした。

どつという顔をして会えばいいの？これから・・・と戸惑いつつ

「どつしたのめぐみ？」

遠くの方から聞こえ、ふと目の前を見ると心配そつに見つめる優香がいた。

「ううん・・・なんでもない・・・」

「大丈夫よ。」

「え・・・でも・・・」

「思い切つて言いなさいよ。」

「でも・・・」

そう言つてめぐみは、黙り込んでしまった。

家に帰ったためぐみ、しばらくして、今日のことを思い出していた。

会社では、山下が自分をめぐみとして見てくれないその現実、胸が苦しくなった。

そして、打ち明けようかどうしようか悩んでいた。

そこへ勇気が「アニキ大丈夫か？」と入ってきた。

「なんだ勇気か・・・」

「何だとは・・・アニキ、しっかりしろよ。」

「何よ。」

勇気のほつを振り返るめぐみ、それを見て

「やっぱり・・・」

「やっぱり・・・って?」

「好きな人がいるんだろう。」

勇気の唐突な質問にめぐみは、赤くなった。

「ば・・・」

声が出ないめぐみ

「そうなんだ・・・いるんだ」

めぐみの顔を指差した。

「なによ。」

「言っちゃいなよ。」

「何を」

「本当のこと」

その言葉にズキと胸が痛み、黙り込むめぐみ、その様子を見て勇氣は

「まあ、無理なら仕方ないけど、あとで後悔すんなよ。アニキ。」

そう言い残しめぐみの部屋を去って行った。

そして、めぐみは決意した本当のことを言うことを・・・

「めぐみさあ。聞いたことある？、朝一の美少年？」

仕事中のめぐみに奥寺が聞いてきた。

「朝市？の美少年……。どっかの朝市かなんかで、美少年が販売でもしてるの？」

「違う。違う。この会社に朝一にやってくる美少年がいるらしいんだけど。」

「どの部署にもいないんだって。」

「それって、都市伝説？」

「そうでもないみたい。この間、総務の山本さんも見たっていうし・・・」

「やばい、それって自分のことかな？とめぐみは思った。」

「今度、女子が探すって・・・言ってたよ。」

めぐみは、話題を変えることにした。

「ところで、彼とはうまくいってるの？」

「うまくいってたら・・・こんな話しないわよ。それと、」

奥山が耳打ちをしてきた。

「それと？」

「まだ、あなた、山下さんを見てるわよ。気をつけてね。」

「あっ……はい。」

じゃあと言い残し、奥山は去って行った。

そこへ「山下さん、ちょっと、話があるんですけど」「とめぐみ山下を屋上に呼んだ。

階段を上がり、屋上へ向かうめぐみ……

本当のことを言おうかどうか、一段……一段……迷いながら上がって行った。

めぐみが屋上に着くとすでに山下が待ち構えていた。

「飯塚さん、話して何、手短かに言ってくれないか？」

「あの、私」とめぐみが思い切って言おうとしたら。

「ちょっと待ってくれ、」

「えっ？」

「これだけは、言っておかないと。俺は、飯塚さんとは、いい同僚でいたいんだ。」

その言葉を聞いて、めぐみの気持ちが一瞬で、遠のいて行った。呆然とするめぐみに

山下の言葉は、容赦なかった。

「言っている意味がわかるな。」

「はい。」

ただ、うつむいて返事をするのが精一杯のめぐみに、山下は、最後

「それに、俺、好きな人がいるから。」

めぐみの胸を貫いた。そして、心の中で”私が飯塚めぐみです。”

と叫んだ。

しかし、その声は届かない。

「じゃあ、お互いがんばろう」「と言って、すれ違う山下

呆然と立ち尽くすめぐみを置いて、山下は、一人事務所に戻った。

山下がいなくなって、しばらくして、ガクツと足が崩れ座り込むめぐみ

どうしてこんなに苦しいの……

私はここに居るのに……

どうしたらいいの？

めぐみは、泣いた。

「めぐみ？」

優香の声が遠くからした。

「めぐみ!?!」

その声にめぐみは、我にかえった。

「優香さん」

そうか、お見舞いに来てたんだ。

「大丈夫？」

心配そうにめぐみを覗き込む優香

「ええ・・・」

「本当にどうしたの？」

そんな時、めぐみの携帯がなった。

「とらないの？山下君からでしょっ？」

「うん・・・まあ・・・」

携帯をとらないめぐみ

しばらくして、携帯がなりやんだ。

「一体、どうしたの？また、喧嘩したの？」

「……」

一人うつむき、黙り込むめぐみ

それを見て、心配する優香

「一体、何があったの？」

「……」

「めぐみ!！」

優香は、そう大きな声を上げ、両肩をつかみ、めぐみを前後に振った。

おもむろに顔を上げめぐみが

「山下さんのこと……あきら……め……よう……」

だんだん声が小さくなっていった。

「めぐみ、何言ってるの!！山下君は、めぐみのこと好きなのよ。」

「けど……」

「けど?」

「私のこと、見てないの……」

その言葉にあきれる優香

「大丈夫よ、山下君にはあなたが女ってこと言ってるのよ!…!何の問題があるの?」

「その問題じゃなくて……」

「じゃあ……どの問題?」

「会社で同じ課で働いている私に気付かないの。」

「え?」

優香には、何のことかわからなかった。

その様子を見ためぐみは、席を立った。

「そろそろ、帰らないと……」

「めぐみ……」

心配する優香を置いて、めぐみは病室をあとにした。

めぐみと連絡がとれないことに焦る山下、

めぐみが女であることを知って、自分の気持ちを早く伝えたい

そう思うことがなおさら、山下の焦りにつながった。

そして、仕事でも思わず、携帯を取り連絡をしていた。

「めぐみ大丈夫？」

声をかけてきたのは、奥山だった。

「はい。」

「昨日から変よ。」

「まあ・・・」

「元気出しなさいよ。」

奥山は、めぐみの両肩に手をかけ、耳元で囁いた。

ふと、山下の方と見るめぐみ、同じ方向を奥山が見ると

山下が携帯をかけていた。

奥山はその光景を見て、

「又、かけてるわよ。仕事中に」

横でめぐみの携帯が振動をはじめた。

「めぐみ、なってるわよ」

反応しないめぐみ……

山下があきらめて、携帯を切った。そして、めぐみの携帯も振動を止めた。

「又、つながらなかったみたいね。」

奥山がめぐみの方を見ると、うつむいて黙り込んでいた。

「まあ……元気出してね。」

数日後、めぐみは、いつもの通り出勤した。

会社に着くと「いた！！」と叫び声がした。

めぐみが振り向くとそこには、総務の山本たちが近づいてきた。

あわてて逃げるめぐみ。

追いかける山本たち

「待ちなさい！」

めぐみは、思わず自分の事務所に逃げ込んだ。

そこには、徹夜明けでうとうととしていた山下がいた。

めぐみを見た山下は一気に目が覚めた。

山下が「めぐみ・・・」と言っまもなく

めぐみはシートといいながら、近づいてきた。

「悪いかくまって。」

そう言って、山下の机の下に隠れた。

「この部屋よ。」

なにやら、数人の女子の声が事務所の外から山下に聞こえた。

そして、カチャと扉が開き

「すみません。」

声とともに山本を筆頭に3人の女子が入ってきた。

「この部屋に、男の人が入ってきませんでしたか？」

その声をかけてきたのは山本だった。

めぐみを見る山下、めぐみは両手を合わせ、口到人差し指を当てた。

そして、あっちと指をさした。

それを見て、山下は、

「そのドアから出て行ったよ」

「ありがとうございます。」

彼女らは、別のドアから出て行った。

彼女らが去ってから、机の下からめぐみが出てきた。

「めぐみ……」

そう言って、めぐみを見つめる山下

「ありがとうございます。」

頭を下げるめぐみ

「どうして、めぐみがここにいるんだ？」

「ちょっとした訳で……」

そう言い残し、めぐみがそそくさと出て行った。

椅子に座る山下、ふと、めぐみがなぜここに来たのか気になった。

しかし、睡魔が山下を襲い机にうつむせに眠ってしまった。

その頃、めぐみは、着替えをすませ事務所に向かった。

廊下の向うから、さっきの女子たちが戻ってきていた。

「おかしいわねえ、どこ行ったのかしら。」

めぐみは、すれ違いざまにあいさつをすると

「おはようございます。」

「おはようございます。あっ・・・あなた、見なかった朝一の美少年
「！」

山本が振り返りめぐみに聞いてきた。

「は？いえ、見てませんけど」

「そうよね、反方向なものねえ」

めぐみは、ほっとした。けど、もうあの格好では、会社に来れない
な。

そう思いながら事務所に入ると山下は、寝ていた。

寝ているのか・・・まだ、早いし、まあいいか。と眠っていると気付かないうちに山下の寝顔を見入っていた。ふと、われにかえりいつもの掃除をし、ひと段落したころ、そろそろ、起こさねば・・・後ろから声をかけた。

「やましたさん、起きてください。」

「うん」

反応がまいちか、よしもう一度と耳元でささやいた

「やましたさん。おきてください」

山下は、おもむろに起き上がり、寝ぼけ眼でめぐみを見た。

完全にさつき見ためぐみと勘違いした。

そして、

いきなりめぐみを抱きしめ

「めぐみー！」

「や、やましたさん・・・？」

しばらく抱き合う二人・・・

やがて、めぐみは目をとし身をまかせた。

「おはようございます」

野本と奥山が入ってきた

あわてて山下は、その手をほどいて、顔を見たたん血の気が引いた。

そこには、同じめぐみでも、事務所のめぐみがいた。

おもむろに目を開けるめぐみ、山下は、おもわず「ごめん。」と謝った。

めぐみも、逃げるように部屋を出て行った。

奥山は、「めぐみ」とめぐみを追いかけた。

野本は、山下に「どうしたんです？」

山下は、パニック状態だった勘違いをしたとはいえ、別なめぐみに抱きついてしまった。

一方、めぐみは、女子トイレまで走っていき、鏡に映った自分の顔を見た。

胸の鼓動が止まらない。どうしようと思ったとき、後ろから奥山の声が出た。

「めぐみ！…どういこと！」

「わたしも何がなんだか…もう…」

「いったいどういこと？」

めぐみは、ただ顔を真っ赤にして、立ちすくんでいた。

いまだに、胸の鼓動がとまらない。

「…」

言葉にならない声でめぐみはつぶやいた

「…そう、やっぱり…」

奥山は、めぐみを見て、言葉を失った。

事務所に戻ってきた奥山は、「めぐみは帰した」と伝えた。

「山下さん、どうも寝ぼけてらしい。」

野本は、奥山にささやいた。

「そう。」

めぐみは、家について、一日、ぼーっとしていた。

山下さんは、やはり、もう一人のわたしを見てたんだと時々涙を流した。

山下には、めぐみの感触がまだ残っていた。

日課のジヨギングで久しぶりに島内を会っためぐみ。

「めぐみちゃん、元気ないようだね・・・」

これが島内の一言目だった。

「まあ、」とジヨンとたわむれる。

「なにか？」

「まあ、わたし、会社辞めようかな？」

その言葉に驚く島内

「どうしたんだい？ なにかあったの？」

ジヨンの頭をなでながら、頷いためぐみ

「上司が、寝ぼけて抱きついてきたんです。」

あきれた表情で島内は

「また、セクハラかい？」

めぐみは頭を左右に振って

「まあ、でも、わたしは、それを訴えるつもりも無いです。」

「どうして・・・」

「わたし、異動してもらったでしょう・・・また、というわけに行かなくて」

めぐみの言葉に納得がいかない島内、真剣な顔をして

「部内で、内緒にしてだな・・・。」

その顔を見て、めぐみは島内の言葉をさえぎった。

「でも・・・もう、いいんです。」

「えっ?」

めぐみの言葉に驚く島内、めぐみは、立ち上がりぐっと背伸びをして、

「すつきりしましたから・・・そういえば、優香さんは、どうなんですか。」

「ありがとうございます。順調だあとは移植を待つだけだ・・・頼むね、めぐみちゃん」

「はい。」

めぐみは、女子の格好をして入社した。

やはり、総務の山本さんたちは、朝一の美少年を探しているようだった。

「おはようございます。」いつもは、朝一の出社のめぐみだったが、

この日は、定時の入社だった。

「だいじょうぶ？」

最初に声を掛けたのは、奥山だった。

「なんとか・・・」

「山下さんは、島内常務に呼ばれていったわよ。」

「そう、・・・」

「今のところ、部内というより、わたし達4人だけの秘密だから・・・安心して・・・」

奥山は、めぐみをさとした。

「ありがとうございます・・・ところで、山下さんは、何で、島内常務のところに？」

「知らないの、多分、呼ばれたというか、相談に行ったんだと思う。」

「そう、・・・。」

「今日は、大丈夫？」

「うん。なんとかなりそう・・・。」

「じゃ、事務所で・・・。」

「じゃ・・・。」

「まいったよ・・・。寝ぼけていたとはいえ・・・。」

常務室で、山下は島内に愚痴を言い始めた。

「どうしたんだい。」

島内は自分の机からおもむろに立ち上がり、山下のいる応接に向かって歩いてきた。

ソファアに座っている山下は、両膝に肘を立て、手を口のあたりで組んでいた。

「ちよっとな・・・。」

島内は山下の向かいに座り

「それで、抱きついた娘には、どうするつもりだ？」

その言葉に、山下は、びっくつとして、思い出したかのように

「なんで、それを知っているんだ？」

「お前が最初に言ったんだろう。大丈夫か？」

「あっ、そうか・・・」

「で、」

島内が山下に確認すると

「でっ て？」

不思議そうに言い返す山下。

「穏便に済ましたいんだろ。」

島内の言葉に躊躇する山下「しかし・・・」という言葉を返すのがや
つとだった。

それに対し島内は、

「呼んで来い！」

島内の言葉に山下は、別にそこまでしなくても焦った。

「いや、光兄、そこまでしなくても……」

島内は、山下の言葉を全く聞く耳を持たず。

「いいから、呼んで来い……しかも、一人で来るようにな」

そう言って、山下を部屋から出した。

その頃、めぐみは、事務所で、仕事をこなしていた。

奥山もめぐみのことが心配で、ちよくちよく声をかけていた。

そこに、山下が戻って来て、めぐみのそばでそつと言った。

「飯塚さん島内常務がよんでいる。」

さすがの奥山も山下の手を引っ張って、

「ちよつとなんで、常務が・・・めぐみをやめさす気？」

「よくわからないんだけど、呼んで来いって。」

「別に、何もなかったことにすれば、よかったのに。」

めぐみはおもむろに立ち上がり

「はい・・・判りました。」

事務所を出て行った。

「めぐみ・・・」

心配する奥山の声だけが残った。

ポツリ、ポツリと一人歩くめぐみ・・・

やがて、めぐみは、常務室の前に立っていた。

やはり、やめないといけないか？と戸惑いなあら、ドアをたたいた。

「はい」と中から声がした。

「営業8課の飯塚です。」

「入りなさい。」

「失礼します。」

ドアをあけて、中に入るめぐみ

常務は、めぐみに背を向け外を見て立っていた。

やがて、「まあ、座りなさい。」と常務が言った。

「失礼します・・・」

めぐみは緊張気味に、ソファに座り

何を言われるんだろう、やはり、辞職願いを出せと言っただろうか
いろいろ考えたが、やがて、めぐみは、うつむいてしまった。

「元気ないですね。めぐみちゃん」

そこへ島内の声がした。

「えっ？」

ふと、顔をあげると、そこには、島内が立っていた。

「島内さん！」

声をあげためぐみ

えっ？どうしよう・・・島内さんって、島内常務？めぐみは、言葉を失った。

島内は、めぐみを覗き込み話しかけた。

「何を、驚いているんだ。こっちのほうが、もっと驚いているんだから」

今の君のかつこうだったら、わたしも気づかないな……」

「はい。」

めぐみは、うつむいた。

「あいつに言っただけで、めぐみちゃんが女だってこと。」

「えっ、ひょっとして、ここにいる私のことも言っただんですか？」

島内の一言でめぐみの顔を上げた。

「そこまでは……、実際に、君があのもぐみちゃんかどうかは、今まで、知らなかったんだ……さて、どうする？」

島内は、前に座り、めぐみを見つめた。

めぐみは、またうつむいて、黙ってしまった。

「いつも、君は、わたしに、勇気をあたえてくれたよな。」

「……」

「自分に正直になりなったらどうだ？」

ベットに横たわるめぐみ。

携帯が鳴る。液晶を見ると山下からだった。

それを見て、元の位置に戻すめぐみ。

しばらくして、携帯の着信音は切れた。

どうしたらいいんだろう・・・

ただ、悩むめぐみ。

本当のことを言うかどうか。

でも、この間のことを思い出す。

そして、山下さんは、同じ私でも、同僚の自分ではない私を・・・

もし、私が同僚だとわかったら、もう会えないかも・・・

そう思うと、電話に出る勇気もなくなってきた。

でも、でも、本当のことを言わないと。

何度も何度も、迷うめぐみ、

めぐみの携帯が再びなったのは、その時だった。

また、山下さんからだろうと見ると、優香からだった。

「もしもし・・・慌ててとるめぐみ・・・」

「めぐみ・・・どうしたの?」

「どうしたのって?」

「山下さんと同じよ。」

「あ・・・言葉に詰まるめぐみ」

「あ・・・じゃあないわよ。今日来て、あなたのことすごい心配していたわ。一体何があったの?」

「それは、」とめぐみが説明しようとしたら、

「ごめんなさい。看護婦が来た」と優香は携帯をきった。

優香の言葉を聞いて、山下さん、少なくとも、もう一人の私を心配してくれんだ。

そう思うとある言葉を思い出した。

「自分に正直になりなったらどうだ?」

そして、めぐみは携帯を手にした。

山下の携帯がなった。

「なんだよ、めぐみ。．．．いままで、出なかつたくせに．．．」

「ごめんなさい。．．．」

「今から、会うか?．．．」

「いえ、明日、私の本当の姿をみせます。」

「本当の姿?」

「じゃあ。朝7時に事務所で．．．」

言う言葉を残し携帯は切れた。

何なんだよ、急に掛けてきて。

しかも、明日朝7時に、事務所なんて．．．

しかし、山下は内心、うれしかった。．．．

やっと会える。そして、やっと言えると．．．

翌朝、めぐみは久しぶりに、男の格好をして出社した。

めぐみ、大丈夫だから．．．と言いついて聞かせて。

7時までに事務所につき、着替えずに、事務所に入った。

そこには、山下が立っていた。

めぐみを見つけると。「めぐみ……」と近づいてきた。

「山下さん……」とめぐみが声を掛けた

「なんだい……」

「私の名前覚えてる？」

「めぐみだろ。」

「そう、わたしは、飯塚めぐみです。」

「だから、何なんだ。」

山下は、不思議そうにめぐみを見つめた。

「実は、わたし毎日、あなたを見ていたの。」

「えっ……」その言葉に驚く山下

「わたしは、あそこの席で、毎日あなたを見ていたの。ここに来てから……ずっと」

「うそだろう……」と腰を抜かして、いすに座った。

「じゃあ、着替えてきます・・・」

とめぐみは、事務所をさった。

うそだろう、本当に、飯塚は、あのめぐみ？

山下は、困惑し頭を抱えた。

しばらくして、「おはようございます。」とめぐみがあらわれた。

半信半疑のままの掃除をしているめぐみを目で追いかける山下、

思わず「飯塚さん・・・」と声をかけた。

その声に手を止め、山下の方を見るめぐみは、おもむろに山下に近づいた。

「はい・・・なにか？」

山下が気がつくとも目の前にめぐみが立っていた。

「あっ・・・」

と言葉を失い、じつとめぐみを見つめた。

「どうしたんですか？」

めぐみの言葉に気付いた山下、

「飯塚さんって、本当にあのめぐみ・・・」

「はい……」

とじっと見詰め合う……

「本当に？」

「はい……」

「今見ている限りじゃ、わからないけど……」

「じゃあ、帰りに、めぐみとしてあらわれます。」

と話していると奥山が入ってきた

向かい合った話をしている二人の姿を見た奥山が、

二人を指差し近づいてきた。

「あゝ、どうしたの？二人して仲良さそうに……」

奥山の登場に驚いた二人は、声を合わせ答えた。

「この間の件で……」

「あやしいなあゝ」

奥山が言うつと。

「ちと……」

めぐみは、掃除道具を持って事務所から出て行った。

「めぐみ、今日あなたたち変ね。」

そう昼食中に話しかけてきてのは、奥山だった。

「えっ、なぜ？」

奥山の言葉に何とかごまかそうと考えるめぐみに奥山は

「ふたり・・・なんか、いつもとちがうというか、ギクシャクしているというか」

「そう？」

「そうよ・・・変よ・・・」

「変って？私まだ山下さん見てた？」

「そうじゃなくて・・・山下さんがあなたを見てるし、二人ともなんか・・・」

「ああ・・・でも、この間の件もあるし・・・ねえ？」

「そうね・・・でも、なんか隠していない？」

その言葉にめぐみはドキッとした、そして、何とかごまかそうと

「ところで、野本さんとはどうなの？」と切り返した。

すると今度は奥山の顔が暗くなった。

「最近・・・女のところについてるみたい・・・」

とため息交じりの声を出した。

「えっ？」

「私の誕生日が近いのに・・・何も聞いてこないの？」

「聞いてこないって、・・・それで、」

「つけてみたの・・・」

「つけた・・・、」

「野本さん、ある美容室みたいなところに入ったのよ

そしたら、茶髪の女の人と仲良く話して・・・驚いたの・・・

それから・・・買い物に出たの・・・ふたりで・・・」

と奥山がものすごく怒りはじめた。

「ちょっと、それって、その美容室、フランって店・・・」

「そうよ、それがどうしたの？」

「茶髪で、長くて、わたしより、少し背の高い・・・」

「よく知ってるわね……」

「それ、わたしの弟……」

「えっ……じゃあ、野本もゲイ？山下さんといい……私は……」

「奥山さん……大丈夫だって。普段、弟は、見た目はおかまみ
たいけど……」

「たまに、彼女へのプレゼントとか……コーディネートしてるの……」

「ちょっと、待って、ひよっとして、急にかっこよくなったのは……
あんたのせい？」奥山は、めぐみをにらんだ。

「でも、奥山さん……野本さんが好きなんでしょ？」

「そうだけど……」

「かっこよくなってほしかったんでしょ？」

「……」とうつぶむいて、すこし赤くなった。

それを見てめぐみはからかった。

「あ、赤くなった……」

「もっっ……」と怒る奥山……

「ごめん、ごめん・・・でも、待って見たら誕生日・・・」

「うん・・・」

奥山はうなずいた。

「山下さん……」

めぐみは、山下の前に立っていた。

手には、休暇願いをもって。

「め……飯塚さん、何でしょうか……」

「これに、印鑑ください。」と休暇願いを渡された。

「これって、え〜2週間!?!……飯塚さん、気は確かか?」

「はい。」とにこやかに答える。

「このままだと、室長には、だせないよ……」

と言いつつ、山下は理由を付け加えて、印鑑を押した。

しばらくして、山下の携帯にめぐみからメールが入ってきた。

”19時にポンドで待っています。”

山下は、仕事をおえると、ポンドへ向かった。

そこには、同僚のめぐみが、男っぽい服装をして待っていた。

「じんばんわ……山下さん」

「ああ……」

めぐみの姿を見て声が出ない山下。

「「「」でもしないと、山下さん、信じないかなと思って。」

「本当に、めぐみなのか？」

「はい。証拠でもみせましょうか。」といい

おもむろにウィッグをはずした。すこし髪をととのえろと。

いつものめぐみの髪型があらわれた。

「もういいよ……」

「そうですね？でも……今日は、すこし付き合っしてほしいから……」

席をたった。しばらくして、いつものめぐみがあらわれた。

「「「」めん。またせた……」

「海浜公園でも行くか・・・」と誘ったのは、山下だった。

二人はならんであるいていた。

「山下さんと最初にデートしたところだよね・・・」

「ああ・・・」

そう言うと山下は立ち止まった。

「どうしたんです?」

「ひとつだけ、聞いてもいいか?」

「はい・・・」

「なぜ、黙ってたんだ・・・」

「なにをですか?」

「なぜ、同じ職場だと、いわなかったんだ。」

「この間するときも、いつも、あなたに正直にはなした・・・」

「けど、信じなかったのは、山下さん、あなたでしよう?・・・」

めぐみは少しなみだ目になっていった。

「じゃあ、なぜ、いまになって……」

「わたしを知ってほしかったの、毎日、近くで見ているもう一人の私を……」

ずっと、ずっと……あの日から……あなたのそばで……

ずっと、見ていたの……でも、あなたは、もう一人の私しか見てくれなかった。」

「それは……」

「でも、両方とも本当の私なんです。……」

泣きながらめぐみは 山下の胸に寄りかかった。

山下の胸の中から小さな声で

「好きです。……本当に好きなんです。……」

しかし、山下は、困惑していた。好きなめぐみが胸の中にいる。

そして、自分を好きといってくれている……でも、なにか……

山下は、めぐみの両肩をもちめぐみから離れた。

そして、「ごめん……」と走り出した。

めぐみは、山下を追いかけようとしたが、悲しみに立ち止まり、し

ばらく、泣いていた。

山下は、ひとり家に帰って、ぼーっと今までのことを考えた。

めぐみにあっけから……

優香と光兄いが仲直りした時……

初めてのデート……

めぐみが襲われたとき……

そして、優香が病気とわかったとき……

いつも、めぐみがいた……

そして、今日の行動を悔やんだ……

めぐみは病院にいた。

この日から移植の準備のための入院がだった。

めぐみの入院を知った優香は、めぐみの所に遊びに来ていた。

「めぐみ・・・わたし、光一さんがいないときは、いつも、こんな感じなの・・・病院ってひまよねえ」

「はじめてなんで・・・今日は検査もあったし。」

「めぐみ、元気ないね。なにかあったの・・・。」

「いえ・・・。」

「飯塚さん、検査結果の説明です・・・。」とめぐみは呼ばれていた。

戻ってきた時、優香は心配そうにしていた。

「どうだった。」

「結果は心配なし・・・。」

「本当にどうしたの、元気ないけど、ひょっとして、山下君とけんかしたの？」

めぐみは、びくつとなり、目から涙がこぼれた・

優香は、黙って肩をかした。そして、「大丈夫、大丈夫・・・」と繰り返した。

しばらくして、落ち着いためぐみは「ごめんなさい。優香さん・・・」

「いいのよ・・・」と優かは笑顔で答えた・

「そのこともあるけど・・・」

「まだあるの・・・」

「今から絶食だって・・・」

きよとんとした優香、すぐに、笑い出した。

「もう、めぐみったら・・・心配して損した。」

「だって、昨日9時から絶食で・・・検査後は、おもゆよ・・・

しかも、もう絶食だって・・・」

「まあ、まあ・・・」

奥山が野本と話をしていた。

「また、・・・」

「なんだい、また・・・」

「また、山下さん、ため息をついていた。・・・」

「なにか、あつたんだろうか・・・」

「めぐみのことが気になってるのよ、きっと・・・」

「えっ」と野本は驚いた。

「鈍いんだから・・・」

山下は、一日、仕事にならなかった。

そして、仕事が終わり気づいたら、病院はむかって走っていた。

優香も病室に戻って、ひとりベットに横たわるめぐみ、

明日は手術かと

手術の前にもう一度だけ、山下さんに会いたかった思いながら、ぼ

ーとテレビを見ていた。

すると、廊下をけたたましく走る音がする。

なにか緊急事態でもおこったんだろう・・・とめぐみは思っている

その足音はだんだん、自分の部屋に近づいてくる・・・

やがて、扉が開いた・・・

めぐみが開いた扉の方をふりかえると

そこには、山下が立っていた。

驚いためぐみは、体をおこし、

「やましたさん・・・?」そう言うと

黙って近づく山下、そして、「めぐみ」とささやき抱きしめた。

山下の腕の中で戸惑うめぐみに

「めぐみ、・・・おれは・・・まだ、釈然としないけど、」と山下は呟いた。

「けど・・・俺はお前が好きだ。」

しばらく、その言葉に山下の腕の中で震えるめぐみ・・・うれしみのあまり目に涙を浮かべていた。

やがて、めぐみが山下の胸の中で「はい・・・」とつぶやいた。

その言葉を聴いて、抱きしめていた手をほどく山下

おもむろに顔を上げるめぐみ、その視線の先にはめぐみを見つめる
山下。

徐々に二人の顔が近づき、唇が重なった。

無事、手術を終えたためぐみ、眠る彼女のそばには山下がいた。

やがてめぐみが目をあけると最初に、山下を探した

そして、見つけて安心したのか、めぐみの第一声は

「やましたさん、おなかすいた・・・」だった。

一方、優香も移植手術を無事終え、まだ寝ていた。

やがて、奥山と野本が見舞いにやってきて、めぐみを見て驚いた。

あの時、山下さんと一緒にデートをしていた男がそこにいたからだ
った。

しばらく、躊躇した奥山だったが、

「あなた、飯塚さん？よね・・・」

「はい・・・」と返事をしていると山下が戻ってきた。

奥山は山下を見て、しばらく考え、

「あなたが、朝一の美少年？・・・」とめぐみに言った。

「ごめんなさい・・・」

「何、謝っているのよ・・・何か？」と奥山は言おうとしたが野本がいるのを思い出し、

「別に、いいわよ。まあ、よかつたわ。元気そうで」

「ところで・・・今日は。お二人そろって・・・」

「今日は、私の誕生日なの・・・」と野本の方を見る

「それで野本さん・・・いつもと違うのね・・・」

「めぐみこそ・・・」と突っ込んだのは、奥山だった。

「じゃあ、早く行ってきなよ・・・」

奥山と野本が立ち去ろうとしたとき

「これで、貸し借りなしね・・・」と奥山は耳もとでささやいて

片手をあげて、出て行った。

数日後、予定よりめぐみは一日遅れて、退院した。

優香の経過も良好だった。

そして、めぐみは、久しぶりに朝のジョギングに出た。

横には、山下が着いてきていた。

いつものコースで島内がおはようと声を掛けてきた。

めぐみは、いつものように「おはようございます。」と挨拶をして

「ジョン元気だったか。久しぶりだなあ」と犬としゃべりだした。

「めぐみちゃんも元気そうで何よりだ・・・」と島内は優しく声を掛けた。

「はい、ご心配かけました。」と答えるめぐみ

「いやいや、こちらこそありがとうございます」と島内が言つと

「ごほん」とせきをした山下・・・

「お、わすれてた」と島内は、山下を見て

「おはよ・・・ところで、お前、ジョンにやいてるんだらう・・・」

「そんなこと・・・なにを、馬鹿なことを・・・」とあせる山下

「今度は、4人で会えるといいですね。」とめぐみが聞くと

「もうすぐだよ・・・」という島内

「あつ、そろそろ時間だ・・・じゃ、ジョンまたな、島内さんも・・・」

二人は、走り去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3097p/>

マイフレンド

2011年6月23日08時00分発行